



龍居頼三の生涯 近代法の翻訳者たち（2）外伝

小野, 博司

戸高, 羽瑠

(Citation)

神戸法學雜誌, 73(4):75-156

(Issue Date)

2024-03-27

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Not Applicable (or Unknown)

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100488542>



神戸法学雑誌第七十三巻第四号二〇二四年三月

龍居頼三の生涯

近代法の翻訳者たち（2）外伝

小野博司＝戸高羽瑠

1. はじめ

本稿は、伊藤博文、伊東巳代治、後藤新平の秘書として活躍した、南満洲鉄道株式会社理事・龍居頼三（以下、頼三）（1856-1935）の自筆回顧録（「回顧録」）⁽¹⁾を翻刻するものである。本稿を起こすきっかけとなったのは、2010年代中盤に、著者（小野）が明治期の西洋法継受の担い手について学ぶために行った、制度取調局御用掛の調査である。⁽²⁾外国の法令や法律書、さらに外国人法律顧問が作成した草案や意見書などの翻訳を行う者たち（「近代法の翻訳者」）の存在に注目してきた著者は、1884（明治17）年3月に宮中に設置された制度取調局に、これに当てはまる人々が多く採用されていることを発見した。しかし、その大半は明治維新前後に国内で外国語を学んだ「国内語学学習者」で、人名事典等に記載のない、現在では「無名」の人物であったため、その経歴を知るために彼らに関する様々な資料を収集した。このとき複写したものの一つが、制

-
- (1) 没年は、「龍居頼三氏」東京朝日新聞（1935年10月15日付）による。
 - (2) その成果が、小野博司「近代法の翻訳者たち（2）—制度取調局御用掛の研究—」法政策学の試み（17）（2016）および「緒方重三郎の生涯—近代法の翻訳者たち（2）補論—」適塾（49）（2016）である。

度取調局に出仕していた頼三が執筆した「回顧録」である。⁽³⁾旧稿では、「回顧録」中の制度取調局時代の描写を⁽⁴⁾引用したが、機会があれば、多くの歴史的人物や事件が登場する彼の立志伝を紹介したいと考えていた。今年度、神戸大学大学院のゼミで講読する機会を持ったので、近代日本法制史を専攻する大学院生の戸高羽瑠氏と共同で翻刻することにした。

頼三の存在は、朝比奈知泉の伝記、⁽⁵⁾佐々木隆氏の研究、⁽⁶⁾後藤新平の伝記⁽⁷⁾を通じて認知していたが、「回顧録」を読むまでは、彼がいかなる経緯で「官僚中のエリートが選任された参事院の官僚のうちから、そのまたエリートが選任された」⁽⁸⁾と言われる制度取調局御用掛に採用されたのか、そして、どのようにして満鉄理事に上り詰めたのかを知らなかった。人名事典等に項が立てられることがほばないため、近代史に時折顔を覗かせるものの知られていない頼三の経歴を紹介することが、本稿の目的である。

頼三は、「多年東京にて元老重臣の間に出入りし、江戸前の文章と、老練溫柔の為人とをもって、要路の人々〔要人たち〕の眷顧〔愛顧〕⁽⁹⁾を受けていた」「政治情報通」⁽¹⁰⁾と言われるが、「回顧録」からは、明晰な頭脳と「象のやうな記憶」力、

- (3) 著者が「回顧録」の存在を知ったのは、奈良岡聰智『加藤高明と政党政治』山川出版社（2006）100頁注（84）による。
- (4) 御用掛だった者が制度取調局時代のことを記したものに、牧野伸顕『回顧録（上）』中央公論新社（1977）106-140頁がある。ただし、参事院時代のことも混同されていることに注意が必要である。頼三の「回顧録」での制度取調局時代の記述は多くないが、当時の雰囲気伝えるものとして貴重である。
- (5) 朝比奈知泉『老記者の思ひ出』中央公論社（1938）。
- (6) 佐々木隆『伊藤博文の情報戦略―藩閥政治家たちの攻防―』中央公論新社（1999）。
- (7) 鶴見祐輔編（一海知義校訂）『〈決定版〉正伝・後藤新平（全8巻）』藤原書店（2004-2006）。
- (8) 山中永之佑「日本近代国家と官僚制（6）」阪大法学（71）（1969）70頁。
- (9) 鶴見祐輔編（一海知義校訂）『〈決定版〉正伝・後藤新平4 満鉄時代 1906～08年』藤原書店（2005）616頁。
- (10) 東京大学法学部近代立法過程研究会編『龍居頼三関係文書』「略歴」。

幼い頃からの苦労を糧にした誠実な仕事ぶりで周囲の人びとから信頼される人物だったことがわかる。彼が伊藤や伊東にどれほど熱心に仕えたかは、朝比奈知泉が紹介する「春畝老公や晨亭翁の代筆は、知らざるものをして殆ど本人の手に成りしかと思はす程に巧だつた⁽¹¹⁾」というエピソードからも窺えよう（頼三は、伊藤は壮年の頃揮毫を嫌ったため、彼に代筆を命じていたと述べている⁽¹²⁾）。政治家の中で、最も深く結びついていたのは、同じ年（誕生日は頼三の方が早い）の伊東であった。伊東との出会いは官界入りする前の1880（明治13）年か1881（同14年）で、1883（明治16）年より秘書的役割を果たすようになった。第三次伊藤内閣において自由党との提携のための板垣退助入閣をめぐって、伊藤に不信感を抱いた伊東が農商務大臣を辞した際には、秘書官であった頼三もこれにしたがった。「伊藤派のメンバーでありながら、伊藤よりも伊東に帰属意識・忠誠心を持っていた⁽¹³⁾」と言われる所以である。佐々木隆氏は頼三のことを伊東の「幕僚⁽¹⁴⁾」と評しているが、信頼できる友人であったようにも思われる。

本稿で翻刻する「回顧録」は、1917（大正6）年秋にすでに還暦を越えていた満鉄理事の頼三が、吉長鉄道借款改定契約調印のための「北京二箇月の寄留中の余暇に書き始め」、1921（大正10）年秋に一応の完成を見た全351頁の手書きの自伝である。元々「せめて家系や自身の生立ちは児等にも承知してもらいたいと考へて、（中略）一節でも印刷などして親類や知人に頒つといふやうなことは堅く断つて置」かれたものである。現在は、東京大学大学院法学政治学研究科附属近代日本法政史料センター所蔵『龍居頼三関係文書』に収められている⁽¹⁵⁾。『龍居頼三関係文書』の来歴は不明であるが、東京大学法学部近代立法過程研究会が収集したもので、目録は1974（昭和49）年3月に作成されている。そ

(11) 朝比奈・前掲注（5）32頁。

(12) 「藤の落葉（4）—故公爵思出のかずかず—」東京朝日新聞（1909年10月31日付）。

(13) 佐々木・前掲注（6）279頁。

(14) 同上300頁。

(15) 東京大学大学院法学政治学研究科附属近代日本法政史料センター所蔵『龍居頼三関係文書』（Ⅱ-1）。

の大部分は書翰であり、190名（うち1名不明）249通の頼三宛書翰が収められている。⁽¹⁶⁾ 差出人は、「伊東巳代治・井上毅・江木翼・大岡育造・岡崎邦輔・桂太郎・加藤高明・樺山資英・西園寺公望・白仁武・曾禰荒助・後藤新平・永井柳太郎・古谷久綱・元田肇・山本達雄・吉田清成（政官界）、秋山真之・岡市之助・寺内正毅・坂西利八郎（軍人）、林権助・日置益（外交官）、朝比奈知泉・竹越与三郎・福地源一郎・徳富蘇峰（ジャーナリスト）、益田孝・馬越恭平（財界）、下田歌子・田中穂積・新渡戸稲造（教育界）、白鳥庫吉・田中義成・内藤湖南・三上参次（歴史学者）、清水澄・穂積八束（憲法学者）などの他、夏目漱石や十九代横綱常陸山谷右衛門」⁽¹⁷⁾と多岐にわたる。また、頼三の死後に日本女子大学校教授であった長男の松之助（1884-1961）が編集したと思われる、「母のおもかけ」⁽¹⁸⁾（1935）と題する謄写版の文書（本文73頁）も収録されている。これは、「母が大阪で生れ、少女時代を彼の地に送つたといふことだけは聞いてゐるが、一体どんな環境の間に、どんな生活を送つてゐたのか知らう筈もない」⁽¹⁹⁾子どもたちのために頼三が、妻・愛子⁽²⁰⁾について語ったものである。自らに言及した箇所もあるため、頼三に関連のある部分を抜粋し掲載した。原文にはないものの、読みやすさを考慮して番号付きの小見出しを追加し、今日差別用語に当たると考えられるものは□とした。特に静岡時代については、「回顧録」よりも叙述が充実しており、彼の生涯を知るうえで参考になる。

「回顧録」の翻刻にあたっては、原文で改行となっている部分も追い込みとした。また、読みやすさを考慮して小見出しに番号を付し、それぞれの冒頭に

(16) 後藤新平の伝記で使用されている頼三の日記は、『龍居頼三関係文書』には収められていない。

(17) 伊藤隆・季武嘉也編『近現代日本人物史料情報辞典3』吉川弘文館（2007）173頁「龍居頼三」の項（岸本昌也執筆）。

(18) 『龍居頼三関係文書』（Ⅱ-2）。

(19) 龍居松之助「母の半面」（初出1935）『喜』新樹社（1960）90頁。

(20) 奥田恒七の長女として1859年6月（安政6年5月）に生まれ（内尾直二編『人事興信録』人事興信所、1903、た169頁）、1935（昭和10）年に亡くなった（龍居・同上）。

内容の概説を記した。野線で囲った部分が概説である。翻刻（「母のおもかけ」の掲載）において仮名遣いとルビは原文のままとしたが、旧漢字は一部の人名等を除いて新漢字とし踊り字は直した。校註は、人名を中心にを行い、誤記や不足している部分は〔〕で補った。特に注記しない場合は、国史大辞典編集委員会編『国史大辞典（全17巻）』吉川弘文館（1979-1997）、外山操編『陸海軍将官人事総覧（陸軍篇）』芙蓉書房出版（1981）、外山操編『陸海軍将官人事総覧〈海軍篇〉』芙蓉書房出版（1981）、戦前期官僚制研究会編・秦郁彦著『戦前期日本官僚制の制度・組織・人事』東京大学出版会（1981）、岩波書店編集部編『岩波 西洋人名辞典 増補版』岩波書店（1981）、武内博編『来日西洋人名事典〔増補改訂普及版〕』日外アソシエーツ（1995）、ジャン・W. クランメル編『来日メソジスト宣教師事典 1873-1993年』教文館（1996）、秦郁彦編『日本近現代人物履歴事典〔第2版〕』東京大学出版会（2013）、近代中国人名辞典修訂版編集委員会編『近代中国人名辞典〔修訂版〕』国書刊行会（2018）を使用した。「はじめ」は両名で相談の上で小野が執筆し、概説、校註は戸高が作成したものを小野が確認した。「母のおもかけ」の打ち込み、年譜の作成は小野が行い、戸高が確認した。

最後に、「回顧録」及び「母のおもかけ」の翻刻・掲載にあたっては、頼三の令孫である龍居竹之介先生からご厚意を賜ったことを記し、心よりお礼を申し上げる。また、龍居先生に連絡をとってくださり、翻刻・掲載の手続を行ってくださった松本洵先生、くずし字の読解にあたりご助力を賜った茶谷翔先生にもあわせてお礼を申し上げたい。

2. 龍居頼三「回顧録」

(1) 父家を去て大坂に出つ

頼三の父・泰（嘉）兵衛（丁稚名・亀吉）は、大和国壺分村で代々農業を営む中井家に生まれた。次男であったため商人として身を立てるべく、12歳頃大坂に出た。高木屋（五兵衛）と言う両替商で丁稚奉公をし、20年余りの忠勤の後、一店を預かり、妻を迎えた。泰兵衛は、読書や狂歌を好む人物であったと言う。

父の家の遠祖は吉野落ちの武士と伝えられて居るが、何等拠るべき記録はないさうな。私の父は中級農家の子として大和南生駒村、大字一分〔平群郡壺分村〕⁽²¹⁾と呼ばれる奈良、郡山へは共に二里を隔てる山間の僻地に呱呱の声をあげられたのであつた。家は代々中井庄兵衛の名で相続せられ、現代に至つて居る。父には兄があつた故、他の弟同様分家することに生れた時から極つて居たが、幼年の時より農業を好まずして商人ならんことを望み、分家の如きは己れの欲する所にあらずとして辞退し、単身大坂に出て奉公口を求めたのが十二歳頃であつたと思はれる。

本家、分家は皆中井氏を称へて連綿今日に及び、父の姉妹の嫁した西田、松本の両家も代々相応な農家として暮して居、一分は小村ではあるが父の生家の一門親族は中以下ではなかつた。

昔しは極めて交通不便の土地柄であつたが、今日は大坂軌道の生駒駅から東南僅に十五町、而かも平坦な県道である。

父が志を立てて大坂に出て、伝手を求めて丁稚奉公をした主人の家といふのは今橋通り二丁目で高木屋五兵衛（稲垣氏）と呼ばれる中階級の両替屋であつた。それから二十年余りの間のことは能く分らんが、兎にも角にも十年一日の

(21) 「角川日本地名大辞典」編纂委員会編『角川日本地名辞典 29 奈良県』角川書店（1990）149頁。

如く忠勤を励んだ甲斐あつて一店を預る身分となり、次で別家して迎へた妻が即ち私の母である。

父の丁稚時代は亀吉と呼ばれて居たが元服の後嘉兵衛と改名せられたが、それが何うした間違ひか、戸籍の上では泰兵衛となつて居ることを京橋区から麴町区へ転籍の際発見したが、今更手数料をかけて訂正して置くほどの要もないので其の俣にしてある。父の高木屋時代のことは不明であるが、余暇読書したことの人に過ぎて居たのは疑がない。殊に唯一の道楽は狂歌であつて、多少の佳作もあつたらしいが、残念なことには今は一片紙も家に存して居ない。私は幼少の頃、昔しの両替屋で用ゐた手形の反古の裏面に歌稿らしい父の筆跡を見たことがある。父の俳号は可遊といふた。

(2) 懐かしかつた新喜多

母・永⁽²²⁾の実家は元々新喜多で材木商を営んでいたが、大塩平八郎の乱(1837年)をきっかけに商売替えをした。市中で育てられた幼時の頼三は、遠くは生駒信貴山を望み、目の前には寝屋川が流れるなど景致に富む新喜多への時折の訪問を、楽しみにしていた。

新喜多は京橋から東、半里、野崎詣の街道で、そこに母の実家があつた。遠くは生駒、信貴の山々を望み、目の前には寝屋川の清流が横つて居る景致に富んだ所であつて、今日では片町から新喜多までは町続きであるが、私の幼少の時は新田から新喜多の間には九町?の堤があつた。

新喜多の家の商売は材木であつたので、土地では材木屋で通つて居たが、私の新喜多へ行く時は逼塞中とかで、材木の商売はして居なかつた。私が少々長して母から聞いた所では、母の小娘時代に、かの大塩〔平八郎〕の焼打ち騒ぎがあつて、大坂を重もな得意として居た新喜多の家では一時に大損をして、

(22) 内尾編・前掲注(20)た169頁。

幾んど破産の窮境に陥つた為め、今でもあの通り「諸色儉約、逼塞中」の貼札がしてあると教へられた。

志かし私の遊びに行く時分は蒸籠の製造販売を業として生活に差支への無い程度の世帯であつたらしく思はれた。何にせよ市中の陋屋で育てられて居る私に取つては、時折の新喜多行きは無上の快樂であつた、春さきの紙鳶あげ、摘み草はいふまでもなく、夏の蜻蛉獲り、川漁りの面白さや、朝起きして寝屋川に卸して居る四ツ手網の引揚げを見る時の奥味は得もいはれぬ、それに新喜多の家には私の大好きなお祖母さん（名は乃恵、北河内堀溝村池村氏の出）が居られたからである。

新喜多の家は本来岩崎氏であつたのに、明治の初年、母の弟である伊兵衛叔父の時代に川喜多姓に改めた。新喜多の家の為には私も出来るやうになつてから多少助力して家賃収入だけで、暮しの過半は取れることになつて居たのに、不幸にして男子の嗣がなく、迎へた婿養子が外れたり、又其の残された子供が思はしくなかつたりした為め、私の方へは何の沙汰もなく、家は他人の手に渡し、一家は放田へ移つて居ることが近頃に至つて分かつた。

(3) 私の出生と父の死

頼三（幼名・松之助）は、1856年10月（安政3年9月）に新喜多の母の実家で生まれた。わが子の誕生を心より喜んだ泰兵衛だったが、直後に疫病にかかり亡くなってしまった。父の一周忌が過ぎた頃、大和の中井家より頼三を引き取りたい旨の相談が来た。しかし母はこれを断り、自ら養育することを決意した。こうした事情から明治初年に名字を称えることになった際、「中井」ではなく「龍居」とした。「龍」は大病をした際に母が頼った行者堂の額から採り、「居」は売卜者に考えてもらったものであると言う。「頼」の字は尊敬する頼山陽からもらい、「三」は三番目は好運との言い伝えに肖ったものである。

私は安政三年丙辰九月二十九日、正午を以て新喜多の宅で安々と生れた。最初の産は里方でするのが古来の習はしとかいふことで、母は臨月の初めから祖母が迎ひに来て新喜多の宅に引取られて居たのであつた。そこで早飛脚を立てて大坂なる父の許に安産、殊に児の男なることを知らせたので、父は翌朝踵を宙にして新喜多を訪ひ、生れたばかりの私を抱きあげて喜びに満ちたさうな。

祖父母は頻りに一泊を父に勧めたが、父は止み難い主用があるよしを述べて、黄昏折からの雨を冒して帰坂せられた。これぞ父と私との初対面で、同時に悲しむべき永別であつた。父は浮世小路の家に帰り着いた其の晩から発熱して苟初めの床に就いたが、日を経るままに病勢はすくみ、終に翌十月二十三日、生後まだ一ヶ月にも足らぬ私と仍ほ産蔭に在つた母とを遺して此の世を辞された。病名はただ時疫といふことであつたから、多分今いふ腸室扶斯の類であつたらしい。法名は釈宗順といふ。

父の死去の当時、母は常ならぬ人出入りや、湿めやかな家内の様子を異み、良人の病気のことは知つて居たので夫れとなく祖父母に問ふた所、頓に答へはなくして其の両眼に露を宿して居るのを見て、母は父の死を悟り重ねて尋ねなかつたさうである。

父の一周忌の過ぎた頃、大和の親類から突然の相談が来た、それは母もまだ若い身空ではあり、女の手一つで私を育てることは、仮令本家があつても容易でなからうから、私は大和に引取つて養育することにし、母は里方へ戻つて何れへなり再縁して貰ひたいといふのであつた。けれども母は父の死を承知した其の時から堅い決心をもつて居たので、言下に厚意を謝しただけで拒絶してしまつた。大和では何う考へて居たか、其の後もしやうな話を持出して来たが、母は稍々立腹の態度を示したので、聊か大和側の感情を損ふに至つた。志かし、大和からは相変らず毎年の本願寺参りに狭まくるしい侘ひ住居へ押かけ客のあつたことを子供心に私は覚えて居る。

明治の初年一般に苗字を称へることになつた時、私は当然中井氏を名乗るべきであつたが、大和との関係が右に述ふるやうな次第であるので、寧ろ駈け離れた新しい氏を私の代から称ふるが宜からうといふことに極まつた末、後段私

の大病が平癒した条りに見える行者堂の額、龍正の頭字を借り来つて龍井とせんとしたが、更に或る売卜者に考へてもらひ、井も居と変ることになり、乃ち龍居として戸籍の本が出来たのである。

島田組の慣例で元服の次に名替といふ格式があつて、私は十七の夏この格に進んだから、そこで幼名の松之介をやめ、今の名に改めたのである。頼の字は山陽崇拝から来たので、三の字には意味はないが三番目は好運といふ伝説を追ふたに過ぎぬ。

(4) 私等母子の扶持に就て

父の死後、高木屋から母子に生活費が与えられたが、その額が極めて少なかったため、母は内職をして生活を支えた。また、彼らの心配をしてくれた主人・五兵衛が亡くなると、母子に与える生活費が捨扶持となることを嫌った親類たちは、父の代わりに頼三の祖父(母の父)・新兵衛に日勤して店の取締をすることを求めるようになった。

当時大坂の商人、殊に両替屋仲間では永年忠実に勤めた番頭は別家をさせる、それには相当の資本も貸与すれば、時には得意先きも分けて遣り、一つ暖簾の下に商売を許す慣例であつた処、私の父は単に別家といふ名目だけで小さな家を持たせて貰つた丈で、住み込みが通勤に変つたに過ぎなかつた。それで父の死後本家の高木屋では世間に対する見えもあり、又他の店員の手前もある所から、兎も角私の成長するまでの間、母子に扶持料を呉れることにした。志かし其の金高は昔しの諸色安価の時代でも極めて少かつたことは、母が日夜内職の針先きを休めなかつたのでも察せられた。私の父は本家に勤め中から多少の貯金をして其の大部分は本家に預けてあつたが、その額は本家からも示されず、且つ返還して呉れさうもないので、母は最後までも知らず顔で仕舞つたさうな。

私共母子の境遇に最も同情して呉れた名ばかりの高木屋の主人五兵衛氏は私の四、五歳の頃、三十何歳かの壮齡で死なれ、寡婦のれつといふ人は私の七、八

歳の時、子が無いのと操行上何うとかいふ理由で里方に帰されてしまひ、本家には生え抜きの女隠居二人が残つて居るばかりなので、欲気に満ちた親類の甲乙は細大の家事に口を出すやうになつた末が、私共母子に棄扶持呉れて置くは無用といふ意味から左あらぬ体で一つの難題が持ち出された、それは当時新喜多に隠居生活をして居られた祖父（名は新兵衛）に対して、亡父の代りの積りで日勤して店の取締がして貰ひたいといふのであつた。祖父は先方の眞意を度り兼ねぬでもなかつたが、兎に角これを謝絶すれば忽ち母子の扶持の上に影響の及ぶことは明白なので、祖父は意表に出てて快く承諾せられたのであつた。これ等の画策は親類中の智者といはれ、而かも腹黒の定評ある団扇堂（稲垣氏）の主人の方寸より割り出されたものである。

(5) 私の幼年時代と就学

祖父母や母は、出生後まもなく父を喪った頼三を大切に育てた。蒲柳質であつた彼のことを心配して、幼児期には迷信にしたがい女装させたりした。数え8歳の節句から頼三は、近所の塾で読み書きを学んだ。成績は優秀であつたが、11歳のとき高木屋の見習奉公に出ることになり退塾した。

私の幼少の頃は所謂蒲柳質で、いかな月でも高麗橋の島好節といふ小児科医の厄介にならぬことはなかった。今春下坂の時、記憶に残つて居る同じ場所で、島小児科医の表札を見出した時は一種の懐かし味を感じた。多分何代か後の人が父祖の業を襲つて居るのであらう。

俗説に弱い男の児は女装させて置くと健かに育つといふことがあるので、私も五、六歳までは紅木綿裏の袖の長いのを着せられ、塗のポツコリ（大坂ではコツポリ）を穿いて、市松人形や、羽子板を弄んで居たので、度々眞の女兒と誤られたことがある。今思ひ出しても自ら吹き出さずには居られぬ。その愛翫品の第一であつた押絵の羽子板は親類の子供などに遣つたが、最後まで奇麗に

保存してあつた大きな市松人形は、〔長男・〕松之助⁽²³⁾の幼少の頃、背負ひ歩いて遂に滅茶滅茶にしてしまつた。只一の五月幟は幅に仕立てて既に松之助の家に保存せられて居る。

とかく病身の私を育てた母の心労は察するも気の毒であつた上、本家からの宛行ひ扶持は前にもいふ如く極薄いので、母は其の足らずを補ふの為に手を休める暇とはなかつた。それに或る時の如きは頑是のない私は、つい遊びに労を奪はれて他家から頼まれた晴れ小袖に墨であつたか、油であつたか大きな汚染をこしらへ、母に当惑の胸を痛めさせた末、母が先方へ詫言に行くに尾いて往つたことを臆気ながら覚えて居る。

私の境遇は実に此の如く寂しいものであつた。それ故余念なく友達と遊んで居る時でも、風と自分の父のないことが不審に思はれてなんなんだこともある。尤も母の寝物語りに毎度父子の薄縁なりし次第を聞かせられ、私は乳房を含みながら合黙したさうであるが、少々長した時分には、却て母の話が悉く眞実か何うかといふやうな気もした。

私は追々成長するに随ひ、段々父の不幸の時の様子が明白に解り、祖父が亡父に化つて家事一切の世話をして下さる有難味も心に染みると同時に、他人以上の奮発心も起つたが、静かな雨の夜など父は扱て置き苦楽を語り合ふ兄弟も姉妹もないのは、斯くも気淋しいものかと思つたこともある。其の上私を可愛がつて呉れた祖母は六十過ぎたばかりで此の世を去られ、祖父も老健ではあつたが寄る年波の争はれぬことが見え、久しい月日の間、秋の夕暮のやうな落寞さは我が家の上にはばかりあるやうな恨み気が消えなかつた。志かし負惜みかも知らんが両親打揃ふて衣食足つて居る友達の宅の有様を見ても、別に羨ましいとは思はなかつた。

祖父は元來熱心な仏教信者であつた為め、朝夕は必ず常着の上に肩衣だけを

(23) 1884(明治17)年1月に生まれ、1911(明治44)年に東京帝国大学文科大学を卒業。特に庭園史の研究者として知られ、日本女子大学校、東京農業大学の教授を務めた(「略歴」龍居・前掲(19)『喜』173頁、中央探偵社出版部編『日本人人事録 東日本篇〔第4版改訂〕』中央探偵社、1960、786頁)。

かけて仏壇の前で読経せられた。母は屢々釈宗順なる位牌を指して、あれが松（即ち私の幼名）のとき満ぞと教へるので、私は祖父や母と共に檀前に坐するときは尋常ならぬ厳肅さと言ひ知れぬ慕しさを感じた。祖父は私の四、五歳の頃から根気強く口写しに初心経や、御文章を教へ込まれたので、私は畧々暗誦して祖父や母と共に勤行が出来るやうになつた。

父の死後浮世小路の宅を引拂ふて、私等母子は高麗橋二丁目の南隅、肥前屋裏と呼ぶ露路長屋の奥まつた侘ひ住居へ移つた。表通りは船場の中心で、昔も今も三越呉服店と相隣りして居る賑かな所であるが、私等の住んで居た家は極めて陋小なものであつた。今日この界限を見るに露路長屋もなく全くその昔の面影は何処にも残つて居らぬ。私は八歳の上巳の節句から直く表角に家塾を開いて居られた香川先生（名は一郎、若橋漁人と号す）の許に、弟子入りして、読書を授けられた。

その頃伏見町の菓商で鍵屋といふ家の娘、十六、七歳と見ゆるのが、香川塾の女生の首席であつて、母が其の家と懇意であつた縁故から私が馴れるまで当分の内といふことで、毎朝私を迎ひに来て、午後の八ツ下り（今の二時）には送つて来て呉れた。此の娘には男兄弟がなかつたらしく、私は大さう可愛がつて貰ふた。彼女は其の後程なく塾を退つて田舎へ嫁付いたとかで、自然と消息は絶えてしまつたが、常に一種の寂寥を感じて居た私に取つては、彼女の優さし味は今も記憶に存して居る。

私は自分の境遇を理解するに随て他人に倍する奮励心が起つた。それで自分吹聴は気恥しいが、事実香川塾における私の成績は常に同級生を抜いて居たため、年長の同級生から種々の悪戯を仕向けられる辛さに、不本意ではあつたが、凡そ一学期間、可なり怠けて見たが、其の結果は依然一番目に置かれたので、事情を打ち明けて二番か三番に下げて貰ふやう母から先生に内願して呉れたが、却て先生から叱られたり励まされたりして其の俥になつた。これは私が十一歳の七夕の鬨筆の時である。私は此の年の冬、本家の高木屋へ見習奉公に出されることになつたので、迷惑ながら同塾を退かることになつた。

私の幼時に受けた教育の此の如く短日月で、且つ貧弱極つたものであることは、小二十年も校門を潜るのが普通である今日の児等は眞面目に信じて呉れな

いかも知れぬと思はれる。

(6) 高木屋時代、大病から全快

高木屋では、母子に冷淡な親類が実権を握り、その命により頼三は見習奉公に出ることになった。しかし実際の労働は丁稚と同じであった（この時付けられた丁稚名は、亡父と同じ亀吉であった）。翌年の夏、12歳の頼三は胃腸の疾患に罹ったことをきっかけに、一時は危険な状態に陥った。しかし祖父や母は決して諦めず、護摩祈祷や水垢離なども行った彼らの懸命な看病のおかげで、半年余り後に奇蹟的に回復を遂げた。

本家と頼む高木屋は当主の不幸から内輪揉めの止む時なく、差当つて相続人を定める為に親類会議が頻繁に催された。其の結果が団扇堂の倅の一人、弥三郎といふのを養子にすることに極まり、団扇堂の主人が自ら後見役を引受けたので、実権は言ふまでもなく団扇堂の掌中に帰したのであつた。

後見の団扇堂は祖父の剛直を忌む所から、前には亡父の代りとして引出したにも拘らず、此の度は老年を口実として辞退を促したと同時に、幼年の私を亡父の二代目といふ意味で見習奉公に出せと本家の名で厳命が下つた、さうして母にも随時本家に来て他の女中同様働くへしと言ひ渡されたので、祖父は肝癪を抑へ兼ねたが、只私等母子の行く末を案じられて、兎も角も本家の指図に服従することになつた。

そこで私は此の冬から名は見習であつても、実は他の丁稚と何の異なることなく、二六時中体力に相応の労働をさせられた。其の時私は亡父の丁稚名を其のままに亀吉と仮に呼ばれることになつた。翌年私の十二歳の夏、元気に高木屋に勤めて居た時、多少熱気のあつたのに注意せず、背中に灸したのが抑もの因となつて床に就いた。さうして幾人かの医者にかかつて、種々の薬を服用させられたが更に利き目なく、僅か二、三ヶ月の間に脚腰も自由にならぬ程に弱はつた。今考へると何んでも胃腸の疾患であつたらしかつた。

世間は人気で沸き立つ夏祭りの暑さ盛りから、盆燈籠に秋の初めを知る頃までが、私に取つての最危険期であつたらしい。他人の目には到底回春の望みないものとして見られて居たが、母ばかりは、医者が匙を投けても一心で全快させて見せると自ら勇を鼓して居たが、夜静にして人定まつた時分、私は灯陰を通して、床の上から母の面上を窺ふと、憂然の色の深く形はれて居たのはいふまでもなく、私も共々力ない悲しさを感じたのであつた。

医者や薬の効しの見えぬ時は加持や祈祷に走るのも人情の免れぬ所、況して半世紀以上の昔のことであつて見れば、寧ろ当然の成行きであつたかも知れぬ。或る日のこと祖父と母とが此の上は神仏の加護に縋るより外に致方がないと思案投げ首の折柄、島の内役の行者堂で病氣全快の護摩をあげて貰ふたら宜からうと教へて呉れた人があつたので、母は早速島の内へと出懸けた。其の場所は今の南区清水町で大丸呉服店の横町あたりの北隅と覚えるが後年何れへか移転したらしい。行者堂の主は五十余りの老婆であつて、私の雛形を截つて護摩を上げた後、高野山の野生石南花の葉の陰り干ししたのを取り出し、煎薬代りに病児に服用させよと母に与へた。母は護摩の火勢が眞直くに立ち勝つたのは必ず全快を示すものであると説き聞かされ、喜び勇んで帰宅するが否や、一伍一什を祖父に告げて其の日から私は医薬を全廃して、石南花葉に甘草幾片を加つて煎したものばかりを服用させられた。

祖父は前にもいふ如く仏教の篤信家である上、大峯山へは村の先達として度々参詣もし、大の行者崇拜の所から思ひ立つて、毎朝未明に寝屋川の清流で水垢離の行をして呉れられた。私の大病はそれ以来不思議にも日、一日と快方に向つた。諺に薄紙を剥くやうとはこんな場合を指して云ふのであらうと思はれた。秋の末には此の世のものでは無からうと誰人の目にも見られた私は、反て蒲団の上に起き直つて嵐吉（俳優）の似顔を書いたり、小裂れを寄せ集めて力士の化粧禪を細工して楽しむ程になつた。

この奇蹟的快気の様子を見た母は、いよいよ信心を篤うし、看護に一層努められた。其のお蔭で私は此の年の暮れ、幕府の運命が窮まつて世間の最も騒々しい時に計らずも床払ひの喜びを見たのである。

(7) 高木屋との絶縁と行商

頼三が大病を患っている間に、内紛の絶えなかった高木屋は廃業することになった。この時、龍居一家は高木屋との絶縁を決断した。今後の生活のために母子は大和の中井家を頼ったものの相手にされず、河内縞の行商で生計を立てることになった。長患いの後であったが、頼三も 15、6 反を背負って母を助けた。

私が大病に罹つて半年以上も佗ひ住居へ戻つて居る内に、本家の高木屋は内部の紛擾絶え間なく、其の末が後見団扇堂の意見で、父祖伝来の両替商を廃めて挙家北野の別荘へ引き籠り、自ら田畠を耕して暮して行くことに極まり、廃業と同時に十数人の男女の雇人に暇を出し、特別関係の数人だけを北野に連れて行くことにしたので、私等母子にも北野に来て共々働けと言ひ渡されたのである。

祖父や母も早晚こんな事にならうと想像して居たので、最早扶持料などに未練を残さず、又金高は不明であるが父の存生中の貯金のこともいひ出さず、奇麗に本家との縁を絶つ方が寧ろ私の生長後に面倒がなからうと決心して、高木屋の近親である木綿屋（本町で質業を営んで居た）の女主人を介して其の由を申出た所、先方では思ふ壺に落ちたとばかり会心の笑を漏して即諾したといふことであつた。

さて本家と絶縁した暁には、私等母子は今後如何にして生活すへきかが当面の大問題となつて来た。それは素より何等かの確備があつてのことではなく、唯折に触れての先方の仕向けが如何にも水臭く、其の行り方が皮肉であつた為に止已を得ず最後の決心をしたまでで、老年の祖父や病後の私を抱へて居る母としては口に立派にいひ出したものの前途を考へると嘸かし心細かつたことと思はれる。

そこで何をすればとて第一の必要は資本である所から大和の中井家とは父の歿後多少感情の面白くなかつたこともあるが、兎も角十二年来別に厄介もかけ

ず、其の上父の存生中是れも金高は不明であるが融通して置いたもののあることを母は知つて居るので、夫れとなく相談を試みる積りで母は私の手を曳いて弘暁家を出て闇がり峠の嶮岨を踏み越え、山中では迫剥きでもしさうな人相の男に跟けられなどして日没後漸く中井の本家に辿り着いた。然るに肝腎の当方からの資本相談には叔父達は更に乗つて呉れなかつたので、母も衷心不満を抱いたのであるが、それ以上に話懸けるを無用と諦め一泊早々手を空しくして帰路に就いたのであつた。

大和に行つた序に奈良を見物した。その時私は子供心にも三笠山的美観に打れた所から後年自ら笠正の号を称したのである。言ふまでもなく父の生れ故郷に程遠からぬ所に因んだのである。それから生駒聖天にも廻はつたが今は何等の印象も残つて居らぬ。

その後大和とは自然に疎縁になつて、私は明治二十二年の春〔枢密院議長〕伊藤〔博文〕公に従つて月瀬の観梅に出かけた時、奈良に逗留中一度訪問したいと思つたが、果さず。今春閑散の身となつたのを幸ひに京阪一遊の際、実に五十五年振りて尋ねて往つて中井始め松本、西田など一族の人々に会ふことを得た、但し先方からは私の幼時にも度々来られたことは前に述ふる通りで、後年小役人時代に於ても若者を上京させて来たり、富士見町の官舎や上六の宅へも庄三郎叔父始め親類の誰れ彼れが来て泊まつたことはある。

高木屋と絶縁した当時私等は太和で体無く弾ね付けられても、再び本家へ泣きを入れることもならぬので、仮令一文菓子を売つても其の日の煙を立てて行かねばならぬ境遇であつた。それで祖父始め種々考へられた末の商売といふのが河内綿と称へる木綿反物を行商することであつた。

然るに翌慶応四年（私の十三歳の時）は正月早々から伏見鳥羽の戦争があり、市内では大抵門石を隠して婦女老幼を近在の親類などに預ける騒ぎで、私等一家も堀溝の叔母の許に避難し一ヶ月程も同地に過したため帰坂後商売に取り懸つたのは多分三、四月頃であつたかと覚える。

そこで新喜多の懇意な今福の木綿問屋に頼み込み最初に敷金を入れて凡そそれに相当する河内綿を借り出し、隔日位に勘定を立てて品物は其の度毎に新し

いものと交換して貰った。私共母子はそれからそれと伝手を使つて市内の隅々までも行商するのであつた。高麗橋と今福との往復だけでも三里に余る道のり、それに十三歳になつたばかりの、而かも大病後の私としては持重りのする木綿の十五、六反も背負はされるのは決して楽ではなかつた。

私等は毎朝宅を出る時に昼弁当を荷物の中に入れ時刻が来れば得意先きの椽端でも借りて済ますのが例であつた。さうして湯茶などを貰ふ時に先方の扱ひが余り深切であつたり、又案外冷かであつたりすると、母は何だか感慨に堪へないやうな面持ちして折には眼元を湿して居られた。

(8) 島田組の奉公始め

母子の境遇を憐れんだ鴻池家の奉公人であつた隣人の口利きで、頼三は、三井組、小野組とあわせて三家と称されていた豪商・島田組へ住込みで奉公に出ることになった。奉公先では、店内の掃除や使歩きなどの雑用をこなす一方で、空いた時間には読書に勤しんだほか、明治に入り特に必要となつた漢文や英語を学習した。漢学と英語の学習は、その後も続いた。

佗ひ住居の隣りに善兵衛といふ人の夫婦が住んで居た。同家には子供がないので私を可愛がつて呉れ、又母に対しても深切な慰め手であつた。此の人は鴻池の出入方と唱える通勤の下男に過ぎなかつたが、元來人情に厚い人であつた。或る日のこと訪ねて来ていふには、河内縞の行商も宜からうが、女子供には骨が折れ過ぎやう、それよりも母御は手にある針仕事で暮しを立てることにし、松ちゃんも然るへき大店へ奉公させて後日の出世を待たれる方が安心ではなからうか、幸ひ島田組の両替店で子供をさがして居られることを弟（石亀といふ島田組出入の魚屋）から聞いた故、異存がなくば同人から申込ませようとのことであつた。

島田組は当時三井組、小野組と併せて三家と称せられ、その本店は京都釜座御池にあつた。大坂は勿論出店であつて、両替店、呉服店（屋号恵比寿屋）と

も高麗橋西詰の北角を廻つた一構に並んで居たのである。母は私の生ひ先きに付て明け暮れ胸を痛めて居た時であるから、善兵衛老人の深切なこの勧めには心を動さずには居られなかつた。そこで早速祖父や新喜多の叔父にも相談した所、孰れも同感なので直に善兵衛老人を頼むことになつた。

私は兩三日の後、島田組へ目見えに行き二晩泊つて三日目に小僧監督の役をもつ賄方から試験みたやうなことをされ即座に採用と極まつた。時は明治元年戊辰の十二月中旬であつた。さて島田組へ住み込んで見ると万事が鷹揚であつて、素より窮屈な高木屋とは比較にならず、上の老分と呼ぶ隠居様の最故参者から、下の炊事に当る下男までが所謂店者気分であつて、私は曾て味はぬ暢気さを覚えたのであつた。

私達の日課は夫々当番が定まつて居て、店内の掃除やら外顧の使歩きなどをするのである。其の間には京都本店へ出す文通の写をさせられたり、為替経文や一札類を高浜といふ師匠の手本に依て習はされたりする外、珠算の稽古で幾んど手の透く暇がなかつた。珠算は香川塾へ通学の時代に今橋の福田先生の所へ通つたが、余り好きの方でなかつた為め、島田組へ入つて後ちにも毎々閉口したのは此の珠算であつた。読み書きの方では故参の連中にも負けなかつたが、使歩きでは度々遅いといふ小言を食つた。果ては私が辻講釈を立ち聴きすることが露頭に及んで半講の綽名を同僚から得た。その意味は使に出れば時の半は講釈を聴て居るといふのである。島田組の奥蔵の内には大抵な貸本屋位ゐの通俗書籍が貯へられてあつた。さうして盆正月の休みや休夜と唱える甲子とか庚申とかの晩は私達の夜業は総休みであつて、各々奥蔵から好きな書籍を持ち出して就寝時刻までは随意に読み耽けるのであつた。私は此の時代に於て太功記、義士銘々伝、源平盛衰記、八犬伝、弓張月、俠客伝、三国史、漢楚軍談、西遊記など手当たり放題に読み尽すことを得たのであつた。

明治初年には漢文其のままのものや、漢文崩しの仮名交りのものが詔勅とか布令とかいふ形式で雨のごとく下つた所、私達は言ふにも足らんが、番頭手代の連中でも理解の出来る者が幾んどない始末から、急に漢学奨励の申渡しを老分から出たので、私も公然夜学に遣つて貰ふことになつた。それで私は島町の戸谷菴堂先生の塾に通つて十八史略、八大家文、古文眞宝などを教はつたのである。

其の内追々英学流行の時勢となつて来た所から、私は川口居留地のハルトリ〔一〕商会に往き金二朱（十二錢五厘に当る）を投してスペルリングブック一冊を買ひ、更に心斎橋筋の書店で英語階梯と題する和紙横綴ちの仮名付き本を仕入れて来て、内々でエー、ビー、シーの独習を始めたのであつた。後年私が東上の決心をするまでの間、島田組の支店や出張所のあつた岡山、広島、高松、丸亀等を勤め廻つた時も到る処、先づ求めたものは英漢学の先生であつたが、漢学の方は何地でも容易に得られたが英字の方は門戸を開いて教へて居る先生が稀れであつた。

（9）漸く得意の時代に入る

明治政府が正楮引換の令を出したことに伴い、正金の真贋を鑑別する者が必要となった。島田組からも人を出すことになり、高木組時代にこれを習い覚えていた頼三がその一人に選ばれた。年少故に当初は包方（鑑定済みのものを紙包する役目）であつたが、実力を認められた結果、調方（鑑定をする役目）を務めるようになった。これにより彼は店内で大きく進級した。16歳の春、民間の分析所を起こすために造幣局の久世治作から分析の方法を学んだが、後にこの計画は頓挫した。

私は多少上役から認められるやうになつた、而して十五歳の正月には半元服を許された。これは異数の抜擢といふことであつた。半元服とは俗に角前髪といふて、前額の左右に一寸角を入れて剃り付けるので、丁稚仲間では最も名譽の表章である。私が此の正月の出番（外出帰宅を許される日）に突然角前髪で宅に帰つたので、母は凝視しつつ踊り上つて喜んで呉れた。

私は其の翌年更に元服の格に進んだが、事実は角前髪から直に散髪になつて仕舞つたので元服はしなかつた。私の世間に先んじて散髪となつたのは後段にいふ分析の稽古時代であつた。其の時は母が前の喜びに反して泣かんばかりに失望の色を見せた。世間からも島田のざんざりで通用する程の輕侮を受けたの

である。母は私の元服姿を見るのを多年心待ちに待つて居られた為であらう。当時散髪の世間受けの悪かつたことは今人の想像の出来ぬ位であつたので、時の府知事は散髪ものの二番目狂言を演ずることを芝居関係者に依頼したこともある。私は見ず、又筋も覚えて居ないが、〔妻・〕愛子は新五人男でガラスの照平、シヤツポの金助などいふ役があつたと古い通を語て居る。兎に角大坂の方が東京よりも早く散髪奨励劇を出したやうに思ふ。

余事は扱て置き私の破格進級に付ては自ら理由のあつたことを少しく述へよう。私が高木屋に勤めて居た短い日月の間に相当興味を以て習ひ覚えた正金、即ち主として二分判の真贋を鑑定する仕事が、まだ甚だ未熟のものであつたにも拘らず、図らずも島田組に於ては重要な意味を以て認められるやうになつた。其の次第は明治政府が維新の際、先づ差支へを感じたのは通用貨幣である所、固より何処にも潤沢に正金の準備があるでもないので、政府は越前藩士三岡八郎（後の由利公正子）の建言を納れて「通用十三年限」と銘打つた太政官札なるものを発行したが何分不換紙幣のこと故、市場に於ける正金即ち徳川二分判との直開きは非常のものであつた。

そこで政府は各藩に向て正楮引換といふ令を下した。それは各藩の禄高にに応じて、貯蓄の正金を出させ、政府からはそれと同額の楮幣即ち太政官札を交付するのである。一つの理由は正金と太政官札を平価で通用させん為にあるが、他の理由は各藩が財用窮乏の余り私鑄した悪性の二分判、当時薩とか筑とか唱え俗に国金と称したものを一掃せんとするにあつたらしい。果して各藩から持出して来た正金の内には夥しい国金が交つて居たゆゑ、政府は此の種の悪貨は容捨なく贋金と看做して処置し、太政官札の代りとして納ましめないことに議を定めて居たので、正金と楮幣との引換に際し正金の真贋を鑑別することが中々面倒な仕事となつたのである。

正楮引換の場所は中の島の会計局内であつた。前にいふやうな訳で一時に多数の鑑定人を要することになり、東京から旧金座の役人であつた青木米太郎以下の人々が下阪して来た。（此の青木といふ人は大音羽屋と呼ばれた坂彦の似顔を描くことが巧く私のねだりで度々画いて呉れた）大坂でも三井、島田、

小野が中心となつて旧十人両替と称した仲間から鑑定人を出したのである。島田組からは名代（主人の代理をする意味）の小西政五郎氏、旧明石藩士で近頃店員になつた平井雄介氏と私の三人が出た。私はまだ子供なので調（鑑定）方でなく包（鑑定済みのものを紙包とする）方の名称であつたが旧金座の連中から鑑定の実力を認められた為め、事実調方を勤めるやうになつた。随て私は店内に於て同輩を凌いで前例のない進級をさせて貰へたのであつた。

私達の詰め所の奥は会計局の大広間であつて、其の処には監督の田中顕介（光頭伯）を始め山口範蔵（尚房）松尾寅之助（臣善男）何禮之などの諸氏が出勤せられて居た。私は後年宮相たる田中伯に当時の模様を語つて互に一笑を催したのである。私は此の中の島通ひの時代に千両箱や紙幣入りの長持を載せた車を押したり、船を漕いだり好んで下男共と一緒に力業をした為め、他人の目にも止る程に急に背丈け延ひて健康は更に良くなつた。私が島田組に初て入つた時分は仲間でも小粒の方であつたので、他の松の字を冠するものと区別する為めチツベ松と呼ばれたが、中の島通ひの頃から漸く侪輩にも憚られるやうになつた。

私の十六歳の春（明治四年）三井、島田、小野の三家から造幣局の久世治作（喜弘翁）氏に頼んで分析の伝授をして貰ふことになり、島田組から小西政五郎、妻木芳兵衛（此の仕事の為に新に入りたる人）の両氏と私とが出ることになつた。三井組からは主人家の三郎助氏と附添の意味もあつて松井芳蔵（岩倉大使の一行に加つて渡米した当年のハイカラ）が出た。後年人形町通りの旧銀座路の土砂を分析したのは実に松井氏であつた。小野組からも相当の人が出たが今は其の名を記憶せぬ。

私は幼年の時から鍋釜鑄掛屋の跡を追ふて帰路を失つたこともある程、風櫃子仕事には興味を有つて居た。島田組の丁稚時代には川口で汽船の機関室を覗き廻ることも一つの道楽であつた。長して後の時計好きも其の由来する所は三つ兎の魂の消え去らぬのではあるまいか。こんな次第で私は店から一里を隔てた川崎の久世氏の官舎へ通学することは何等の苦痛を感じず、寧ろ好む所に向て進んで行く気がした。而已ならず当時私達の仲間では望んで容易に得られな

い詰襟の洋服や、歩く毎に音のする靴が店費で給せられるので独り得々として居た。私が毎朝出懸けるのは大人連中よりは遙に早いので茶漬け所か、水漬けで済したことは度々であつた。それで帰つて来る頃は必ず日が暮れて居た。

私等が分析の稽古に遣られたのは、追て三井、島田、小野の事業として民間に分析所を起す準備の為であつたさうなが、此の計画は何か訳けがあつて見合せになつたので、随て私等の川崎通ひも中絶してしまつた。併し私は金銀分析の一通りを覚え且つ之に必要な高度の硝酸を作ることを習つた。尚ほ私は作州で買付けてあつた緑磐を受取る用を帯ひて備中の妹尾へ遣られた。それは同地の畳表の問屋の某が仲次人である関係から私は二十日ばかり某の家の客となりて、為替や通信のことを扱つたのである。大坂を立つ時は安治川の三番から右の某の持船に同乗し、三昼夜程かかつて備前の牛窓に着き、それから船を捨て、妹尾までは徒歩で行つた。何にせよ百名ばかりの和船ではあるが瀬戸内海を駛る愉快さは初旅の私に取つては殊に面白味を感じた。

(10) 東上の志は久しかつた

頼三が東上の志を抱いたのは、第二次長州征伐の時に高木屋に下宿していた旗本から聞いた話がきっかけである。明治に入り、三井・島田・小野の三家は各県所在地に支店出張所を設けることになり、頼三も中国（岡山・広島）や四国（高松・丸亀）で勤務した。しかしこれらの地では英語学習の継続が困難であることに不満を持った頼三は、島田組の後見格で元香川県参事であつた田辺密（商法起草者・田部芳の父親）に懇請し、明治6年秋に東上の機会を得た。

まだ高木屋が表面の繁昌を保つて居た時分、長州征伐の令が出て將軍進發といふことになつた際、多数の旗本などが大坂に入り込んだので市中の富豪とか、寺院とかいう向きは徴發の有様で長い間、宿をさせられることになつた。高木屋も余り手広ではなかつたが奥座敷始め重みな室は割当に使はれ、生駒権

之助といふ旗本の主従十五六人が泊つて居た。この生駒氏は下谷三味線堀に邸を構へて其の所に金毘羅神社があつたので、有馬の水天宮に次いで有名であつたさうな。幼年の私は毎日のやうに本家へ出懸けて殿様の機嫌伺ひをしたのが縁で大さう可愛がられた。果ては膝下に引寄せられて、大きくなつたら是非江戸へ来いと度々勧められたのが耳底に止まつてあつたが、私は長するに随て東上の望みが弥々強くなつた。それは昔の江戸よりも明治初年の東京を視ることは私達青年に取つては今日の洋行以上に共通の希望であつたからでもある。

さて私等が川崎通ひを止めた頃から三井、島田、小野の三家では幾んど競争的に各県所在地に支店出張所を設けることになつた。当時三府は別として七十二県の収納金は多く官吏の手で現送せられ、まだ為換機算らしいものがなかつた為め其れ等の便を開くのが趣意であつた。私は初に開店前の岡山や広島に遣られ、後には次に業を創めて相応に忙しかつた高松や丸亀へ廻された。私は行く先々で英漢学の師を求めたが漢の方は兎も角、英の方は至難であることは前にもいふ通りなので、丸亀勤めの時急に宿志が遂げたくなつたので東上の決心をした。

恰も好し島田組の後見格で旧と香川県参事であつた田部密氏、(彦根藩士苔園先生) 私が時折遠方から起居を問ふた拙文に対しても丁寧に朱書して字句の穩かならぬ所を正して戻される程、後進を引立てるに深切であつた人が、偶々島田組の用事を以て東上せられることを漏れ聞いたので、私は丸亀から志を訴へた所、幸に快諾を得たので早々夫れ夫れの手順を尽して大坂へ引揚げ、程なく田部氏に随伴して東京に来ることが出来た。是れは明治六年の秋、私の十八歳の時であつて、同行者には氏の令息、今の芳博士と数江駿夫(後三左衛門と改む)氏の外一名の書生が居た。

神戸から乗つた船は米国四番館の飛脚船(メールの訳)ニューヨーク号であつたと思ふ。外輪の二千噸位のものであるが、東海道五十三次を十日以上も費して通行した記憶のまだ去らぬ時代のこととて、僅か十八時(三十六時間のこと)で寝ながら横浜へ行かれるといふて大変な好評を博して居たのである。其の頃の船員は船長、機関士始め重もなものは皆西洋人であつて、ボーイは悉く支那人であつた。さうして賃金は上等墨銀二十五弗で洋食付、下等は十弗で弁当も無かつたと覚えて居る。私等の青年連は無論下等なので余り楽ではなか

つたが、食べものは神戸から用意して乗った。

(11) 希望が成就して東京の人

頼三は上京後、主人である島田八郎左衛門や小西政五郎氏らが住んでいた両国村松町へ落ち着いた。次第に主の信頼を得て名のある人々のもとを訪れるようになった彼は、元参議・後藤象二郎の知遇も得た。島田組が破産した3年後の1877（明治10）年、浪人であった頼三を心配した後藤から高島炭鉱の手伝いを誘われたものの、すでに静岡行きを決めていたために辞退した。

私が多年夢現つにも望んで居た東京に住うことが出来るやうになつたので、心中の喜びは形容する言葉もない程であつた。志かし私が写真で見たり人から聞いて居た東京と、私が現在身を置く東京とは大さうな相違であるやうに感じた。さうして其の相違の点は私の想像して居たよりも甚しく不規則な町で、家並みも京坂の如く振はず、只到る処人間の多いことは想像以上であるが、夫れが又時勢後れの連中とも見え、大体に於て広い汚い都会が私の目に直覺的に映したのが最初であつた。但し見聞の時日を累ねるに随ひ流石首府の広大さを知つたことは勿論である。

さて私が新橋へ着いた時分のことをいふと京浜間の汽車が通した翌年で、由利〔公正〕府知事が丸之内会津屋敷から出た大火の善後経営と東京の将来とを見越して急進的に銀座通りを中心として京橋新橋の間の建物を悉く煉瓦造りとすることを断行した、丁度工事真最中であつたので、大通りは往来止め、そこで私等は三十間堀の狐鰻（今の蜂龍）を俗にいふ草履脱きとして、食事後私は田部氏等と別れて両国村松町の主人や小西氏夫婦の同宿して居られた一町へ落ち着き、当分泊めて貰ふことにした。島田組の支店は後には兜町（今の株式取引所）の新築へ移つたが、私の初て入京した此の時は堀留二丁目にあつたので村松町からは歩いて十分間足らずの距離に過ぎなかつた。

私は着京間もなく例のこく英漢学の先生を得やうと焦慮したが田舎とは勝

手が違ひ先生は相当名のある人も少くはなかつたけれども、何処へ行くにしても道が遠い上、私は店に於ても可なり繁忙の方へ廻されたので熟考の末、丸亀在勤中に半、私の家庭教師のやうであつた部下の二青年を小西氏に推薦して東京詰にして貰ふことになつた。其の一人は旧幕臣で多少英学の出来た山口秀次郎氏、他の一人は漢学の家から出た真鍋鉉左衛門氏であつた。此の二氏も兼て東遊の意が動いて居たので早速来ることは来たが、事実無人の折柄とて二氏共に店の調法役者となり且つ年齢が私よりは四、五歳の兄に過ぎなかつたので、動もすると稽古は二の次になつて遊び友達となるやうな訳けで、丸亀時代の刻合には学問の方は抄らぬやうであつた。

村松町に居られた主人といふのは当主の八郎左衛門氏（内部では北様と呼んだ）と嫡出ではあるが当主の義弟に当る南様の善右衛門氏の二方であつて、共にまだ独身の青年であつた。私が主人と接近することを得たのは実に東上以後のことである。私は追々主人の信用を得て知名の人々の許に使などに遣られたが、其の中でも後藤象二郎伯の所へ往くことは最も好きであつた、伯との初対面は駿河台の邸（後ち女婿岩崎弥之助男の住宅）に居られた頃で、私は伯の堂々たる風采や快活な弁論や平民的態度にはひどく感服したのであつた。最初は正視して物の言はれなかつた私も、伯が高輪へ移られた後、即ち伯の蓬萊社時代になつては他人からは生意氣と咎められる程に平然として話相手をするやうになつた。

序に伯と私との關係に付て一言加ふれば、島田組が潰れて後ち三年、明治十年の夏、伯から急に面談したき由の手紙が突然私の浪宅へ来たので、早速久方振りで高輪へ出懸けて見ると伯は西南の天地に何んな風雲が起て居るかも知らぬ顔に、中段の日本坐敷で珍らしく浴衣がけの俣、懷素の帖を傍らに置いて手習ひして居られた。さうして私への用談を尋ねると、遊んで居るなら当分炭坑社（英人グラバ〔一〕〔(Thomas Blake Glover)〕氏の経営から伯の手に移つた高島炭坑、即ち後に三菱の事業となれるもの）へ手伝ひに来て呉れぬかといふのであつた。当時伯の周囲の重もな人、大江〔卓〕、竹内〔綱〕、岡本〔健三郎〕、中村〔貫一〕などいふ連中は陸奥〔宗光〕、林〔有造〕等の諸氏と共に国事犯と

して捕へられて居たので、実際炭坑社でも無人で困まつて居たらしかつた。然るに私は後段にいふ如く平井氏と静岡行きを約して其の出立も兩三日内と極つて居たので伯に事情を打ち明けて辞退したのであつた。

その時私は伯に書を請ふた所、直に筆を呵して次の七絶を書いて呉れられた。

水楼把酒喚如何 重对峯密感慨多

東魚纔斃又西馬 十年陳迹只山河

伯は先日京都の行在所に伺候した時、十年振りで木戸〔孝允〕と木屋町の旗亭で一酌しなから斯んなものを口吟したのさと説明せられた。私は早速表装して愛玩して居たが二、三年の後某先輩の強借に逢ひ遂に行衛が分らなくなつたのは今に残念でならぬ。私は伯の書はたしかに明治時代の一名物であると思ふ。

(12) 悲しや島田組の瓦解

1874（明治7）年、事業を拡大しすぎた小野組の破産をきっかけに政府は、それまで無担保で扱わせていた公金に対し担保を差し出させることにした。幕末維新期に生じた多額の不良債権、火災、事業拡大が重なり経営状況が悪化していた島田組は、政府から求められた担保を差し出すことができず破産してしまった。長年同家に仕えてきた頼三は、2年余り無給で事後処理にあたることになった。

私が東京へ来た翌明治七年、同業の小野組は余り一時に手を抜げて資金の運転が止まつた為め、卒然閉店するに至つた。此の影響を被つた三井も島田も世間から警戒せられて可なり苦しい立場にあつた上、政府は小野組の破綻に驚いて是れまで無担保で扱はせて居た公金に対し、其の三分一か四分一に相当する公債なり不動産なりの担保を出させるやうな命令を三井、島田に下し其の納期も短かく限られてあつたので、三井組は兎も角弥縫したが島田組は散々苦しんだ揚句、小野組の迹を追ふて瓦解するの止むなきに至つたのである。

島田組の実力は公表せられて居ないから私達に分かりませんが、京都では三

井とも併称せられる程の旧家で、同じく江戸、大坂にも出店をもつて居て名目金（表面は幕府の公金、為替証文の文句にも右者江戸御金蔵下金云々となる）の貸出しも少なくなかつたらしいが、維新以後に跨つたものは大半回収が出来ぬことは私が島田組へ入つた頃、出入りの口入衆（今日のブローカー）から親しく聞いたこともある。其ればかりでなく丸之内火事で尾張町の呉服店（恵比寿屋のこと、即ち後の日報社の所在地）は丸焼けとなり十数棟の土蔵は二、三を余しただけで皆灰になつてしまひ、政府から預かつた太政官札の入つた長持の幾棹も取り出すことが出来なかつたさうな。

私が初て入つた頃の島田組は已に外観程の実力のなかつたことも想像せられるが、若しも消極的に家名を墜さぬやうの方針を執つて居たら無事であつたらうが、何分主人も壮年ではあり、番頭手代でも故参の頑軀は内外で徐けものにせられる時勢であつたから、新進気鋭の連中が自ら中心となつて三井、小野と相競ふて各県下に支店出張所を設け、神戸、横浜にも支店を置いて貿易業を営むやうなことになる、随て相当の人物を要する所が、子飼ひからの番頭手代には他人の中に投り出して一人前の応接の出来るのが少いので、体のよい浪人の召抱へが始まることになつた。

そこで是れ等の新参連は多少の技倆を具へ、功名心も盛んな所から兎角自分見込みで放胆な貸出しや目論見事に手を染めたがつたのである、さうして結局悪意からではなくとも、不注意や無経験から来た損失は所在に多々あつたやうに思ふ。丁度政府が小野組の破綻に鑑みて警戒の手を他に加へるやうになつた時分は最早島田組の無理才覚が行き詰つて居た時分であつたので、島田組からは数回事情を訴へて抵当上納の延期を請ふたが、大隈〔重信〕大蔵卿と善くない後藤前参議が、島田組の総理代人として自身最後の交渉に当られたのが、却て政府の腰を強うしたかのやうな感もあつた。

島田組閉店の際に於ける政府の預金総額は大きく見ても高々貳百万円足らずのものではなかつたらうかと思ふ。当時の民間預金は今日の小銀行程もなかつたことは覚えて居る。寧ろ英一とか蘭五とかいふ外商からの前借の方が金額が纏つて居た。そこで島田組から政府へ提供し得られる筈の公債請書や、土地な

どの総時価が幾許位であつたかは当時も能くは承知しなかつたが、どの道、命令の半分も直くには奉し兼ねる実況であつたから、政府が先づ救済するといふ方針を定めて然る上、出来る限り寛大な処置を取つて呉れるでなければ助かりやうがない、といふことであつた。最後に後藤伯は政府が潰すのだから仕方がないと歎息して主人に諦めさせる始末であつた。

私は数代連綿として続いて来た一名家、殊に維新の大業にも与つて多少の功労のある島田家の一朝にしてに亡ひるのを見ては、暗涙に咽ばずには居られなんだ。けれども未丁年の私としては何う働きやうもなく、只長上の差図を受けて当面の用向を弁するに過ぎなかつたが、私の心中では十三歳の暮から受けた恩義に対する礼奉公の積りで凡二ヶ年の間、売食ひしつゝ東西に奔走したのであつた。関係の残務が片付いて島田組と別かれる時分に、主人から丁寧な謝状を贈られた。主人は一家潰散の数年後病死せられ、更に十数年を経た頃、朝廷から維新の功労を録して八郎左衛門氏に従五位を贈賜せられた。今、三井家の全盛を見るに及んでは当時仮令井上〔馨〕侯の援助があつたり、同家には三野村利左衛門氏の如き協利きが居つたにせよ、余りに島田家の終りと懸隔があり過ぎるので、他を呪ふではないが一種否やな感じが浮ふのを免れぬ。

(13) 奥田家と縁組の次第

妻・愛子の実家である奥田家は、頼三の母の妹（登免子）が再嫁した家であつた。愛子は、叔母の再婚相手（恒七）と先妻の間の子である。彼が愛子と初めて出会つたのは1874（明治7）年、主家の用により下阪した時であつた。翌年再び下阪し奥田家に滞在した頼三は愛子と親しくなり、1876（明治9）年夏に縁談が纏まつた。

私の母の第二の妹（第一の妹、名は宇乃、通称たけ子は堀溝村の池村治兵衛氏に嫁す、ぎん子は其の女である、）登免子は私の幼時、多羅尾庄兵衛氏に嫁した。屋号を小川屋と称へて後ちには北浜一丁目で紙商を営んで居た。叔母との

間に子宝がなかつたので私は殊に可愛かられた。叔父は資性温厚の人で俳句の嗜みもあり、又書を善くした。私の島田組時代には此の人の世話を受けたこと甚た多く、取別け私の母が高麗橋の侘住居を引払ふて北浜に同居するやうになつたのは叔父の厚意から出たのであつた。

然るに小川屋の叔父は生来多病で、常に療養を怠らなかつたが、働き盛りの四十歳になるか、ならぬかに此の世を去られた。其の後叔母は相変らず紙店を續けて居たが、何分寡独で商売して居ることは思はしくない点もあり、且つ遺子のあるでもなければ店は所望者に譲り、其の身は今の内に再嫁しては如何といふやうな意見が私の母や、新喜多側から内々出て居た折柄、近所に住む山本齋助といふ人から奥田家へ再嫁の勧めがあつたので、話は急に纏まり、紙店は知り合ひの望み人に譲渡し、叔母は奥田恒七氏、即ち愛子の父の許に後妻として嫁付いたのである。

奥田氏は大分の人で久しく大坂に住み、其の頃の商売は青筴を主として居たが、以前は回漕業にも関係したとかで、東海道も踏み馴れた侠客肌の人、其の家には先妻の産んだ愛子、歌子の二女兒があつたが、歌子の方は幼時から生母の実妹の嫁付いて居る山内家の養女となつて居たので、叔母が奥田家に入つた時は愛子一人が家に居たのであつた。

叔母の再嫁の話の起つた時分、私は東京に出て居たので、万事を文通で承知したに過ぎなかつた所、七年の夏私は主家の用を以て下坂したので早速奥田家を訪ふて父に初対面の挨拶をした。やがて愛子も裁縫の師匠の家から戻つて来たので、叔母に紹介せられた。当日午後私は僅の余暇を偷んで叔母と愛子を伴ひ、御霊社内「俄」を看に行つた。私は夕方、奥田の家を辞して島田組の勤番部屋に一夜を過し、翌日神戸から乗船して帰東したのであつた。初対面の愛子に対する私の印象は愛嬌のある十六の町娘。只これ丈けであつた。

翌八年の春、私は残務整理の主用を帯ひ再た下阪した。其の時は暫く滞留せねはならぬので、奥田の父に請ふて同家に置いて貰ふことになり、朝夕愛子から兄さんと呼ばれることは、孤独の寂しさに鎖され来た私の心には、宛かも幽谷の聲音ほどに響いたのであつた。同時に私は眞の妹に対するやうな同情心を

以て彼女の前途をも考へるやうになつた。叔母の内話では父は郷里の親類から婿養子する積りで、夙に国許との内談を遂げて候補者たる青年を大坂に呼び上し、一時家に留めて当人同士の様子を見たこともあつたが、何分都会育ちの愛子の意に満たぬらしく、頗から無関心で取合はぬので、父も其の方は望みないものとして居る。去り辻他から所望の話も来るが一人娘のこと故、世継きなしには嫁にも遣れずなど叔母は語り添へた。

愛子の日常生活は唯、裁縫の師匠の家に通つたり、三味線の復習をしたりするだけで、一向書籍を手にするやうな様子も見えぬので、当時大坂の町娘としては普通ではありながら、もつと向上心を促して見たいと思ひ奥田の父の許諾を得て慶應義塾で発行する「学問ノススメ」から教へて見たら段々読書の面白味を解するやうになつた、珠算も手を取つて加減乗除から教へ始めたが是れ亦相応の成績を見たので、私が帰京する時分には豊後から修業の爲め上阪して居た渡辺といふ人に家庭教師の格で其の頃小学校で用ゐて居た教科書を教へて貰ふことにした。愛子が私の家に嫁くやうになつて、多少書物に親むやうになり、殊に静岡時代には林惟純先生に就いて日本外史などを読むやうになつたのは、大阪以来の読書慾が漸次延びて来たことは勿論である。

翌九年の夏、復た主家の残務の爲に下阪した時、愛子との縁談が奥田の父や私の母やの間に先に起り、結局奥田家には歌子を取戻して相続人とし、追ては愛子所生の一児を以て奥田家を継せるといふ条件の下に、話が纏まつた。後年三男、喜久三⁽²⁴⁾の生れるに及び夙く奥田家に入籍したのは此の宿約を履んだに外ならぬ。私共の媒酌役は田部氏に次いで島田組の後見格であつた、宇和島の郷士矢野貞興氏が引受けて呉れられ、八月二十八日を黄道吉日として形ばかりの式を奥田の家で行ひ、その翌廿九日私は母と新妻とを同道して東上することとなつた。其の時私は僅に二十一歳、愛子は十八歳であつた。

今日より観れは余り早婚のやうであるが当時の我々に在りては、世間普通の

(24) 1889(明治22)年10月生まれ(内尾編・前掲注(20)た169頁)。九州帝国大学医科大学卒業。医学博士。ただし戦後の『人事興信録』は、生年を1892(明治25)年10月とする(『人事興信録〔第25版〕上』人事興信所、1969、お355頁)。

年配であつたやうに思はれる。兎に角形ばかりの結婚を済ませた翌日、ほんの手荷物だけを携へて奥田家を辞し、神戸から例の外輪の汽船、たしか広島丸？旧アメリカ四番館の飛脚線であつたコスタリカ号に乗り込み、三等客の情けなくも生牛と三十六時間合ひ住居しつつ横浜へ安着したのが三日目の朝、それでも沖合から遠く富士の秀嶺をを望んだ時の快感は得も言はれなんだ。母は乗船の経験があつたので夫れ程でもなかつたが、愛子は初めての航海とて多少船量の気味もあつて食欲なく、氷片のみを口にして三十六時間を過ぎて来た。

(14) 東京に構へた新宅

母・妻と東京で新生活をスタートさせた頼三は、神田淡路町に家を借りた。職がなかなか見つからなかった彼に代わり、母と妻が近所で針仕事をして生計を支えた。その後、条件は良くなかったが、馬車会社を経営していた島田組時代からの知り合いである山縣昇の下で働くようになった。

私共三人は着京後予て約束して置いた小舟町の如何はしい一旅店に行李を解き、それから毎日家探しに炎天の下を奔走して漸く見当つたのが神田淡路町の侘住居、二個の室と台所があるばかりて一式附きの家賃二円七十五銭といふ約束で兎に角、私共は此に新世帯を持つことになつた。それと同時に浪人の私は何がな職に有り付かんとして日々脚に任して先輩の家など訪つれ廻つたが、素より売りものにする学歴があるでもなく、反つて一口にお店者の古手は潰しの利かぬものと世間から相場を極められて居るので、頓と香しい話に出逢はず、その内には有るか無しの品物を売り食ひする始末で、眞に一銭の余財もなかつた日がある。其の折、生憎知り合先きから小娘が使に來たが、菓餅一枚ないので愛子が火鉢の抽斗から銅銭七厘を探し出して近所の焼芋屋に駆け付け、漸く使ひ娘への愛相を済ましたこともあつた。

此の時頃までは私も何とかならうで、容易に同意しなかつたが、弥々目先きの見当が怪くなつたので、母子三人相談の上、母と愛子とは近所に同し内職す

る人のあるのを幸ひに、一筋八厘で、糸手前持ちといふ仕入物の平紘け帯の手内職を始めて呉れた。元來母も愛子も針仕事にかけては相当自信をもつて居る所から、問屋仕事の数物以外、普通の衣服も仕立てた、当時のこととて工賃は安かつたが兎に角、兩人の努力で私等の貧乏世帯はどうやら之れに由つて日々支へられたのである。

私が幼少の時から機械類を覗き歩く癖のあつたことは前にも述べたが、それが嵩して成人の後には時計道楽となり、島田屋繁昌の頃には他人の爲にもどれだけ撰択を頼まれたり、相談相手になつたか知れぬ。そこで島田組の末季に度々横浜通ひする時分に、ファール商会にあつた銀のコロノメートル、但し鍵巻きで代価百四十円といふ當時に在ては珍らしい逸品が欲しくて堪らず、遂に懇意な中山時計店の主人（名は直正、旧淀藩士）に頼んで手に入れ愛翫措かなんだが、主家の没落後、東西大奔走の旅費に窮し再び中山氏を煩して七十円かの典弁に出した。この時計は後ち大三輪長兵衛氏の懇望に依て譲つたが、質受け其の他に付て中山氏の代人として数度淡路町の侘住居へ是を運んで呉れた人が、今時計王の綽名を得て居る服部金太郎氏である。

私が島田組時代より知り合であつた甲府の人、山縣昇氏が二三の友人と組合て広運舎と称する上州通ひの馬車会社を淡路町に経営して居た所から、私にも退屈凌きに当分手伝はないかとの相談のあつたのを幸ひに、私は何か他に仕事を見付けるまでといふ条件付きで隙人の浪人の内職に通勤することにした。志かし一旦同社に顔を出して見れば他の同僚の手前もあつてブラブラもして居られず、暁の五時頃から夜の十時過までも自然詰め切るやうな事になつたが、私の給料は小遣ひの名義で月三円五十銭か四円といふ情けない訳けでも若干月の間は辛抱せざるを得なかつた。

(15) 東京から静岡へ引越

1877 (明治10) 年夏、島田組時代の同僚・平井雄介が、川崎組の静岡県為替方の業を和久井久次郎に譲る話を纏め、和久井組の代理人として静岡に常勤することになった。彼から同行を求められた頼三は、母・妻からの賛同も得て静岡行きを決意した。2年程後、元来資力の豊かでなかった和久井組は業を手放した。旧岡山藩主・池田家を後ろ盾する永島組がこれを引き継ぎ、頼三は請われてここで責任者を務めた。この静岡時代に頼三は、静岡中学校の英語教師夫妻から英語を教えてもらい交流を深めた。また2女を授かった。

翌歳は明治十年、一月早々から西南の風雲穏かならず、遂に私学校党の暴挙となり、老西郷の躍起となつたが、其の夏の初め正楮引換以来島田組の最後まで同勤した平井氏が、川崎組の代理高橋宗八といふ人と相談して同組で取扱つて居た静岡県為替方の業を、和久井久次郎氏に譲ることの相談が纏まり、平井氏は和久井組の代理人として静岡に常勤することになったので、私にも同行して呉れとの話が突然にして起つた。当時の私の境遇としては一儀に及ばず承諾すべきであるが、折角志を立てて東京に舞ひ戻つて来た一年も経たぬことでもあり、母や愛子の失望も思ひ遣られるまま暫くは答を保留して置いて帰宅後、母や愛子の意見を聞いたが、案外にも兩人とも即座に静岡行きを賛成し、私にも切に勧めたから私も志らばと意を決して其の旨を平井氏に通した。

此の年は安政以来、絶えて噂にも上らなかつた虎列拉病が、西南戦争の末期頃から全国に流行し、東海道筋は殊に甚しかつたので、聊か躊躇もしたが静岡に於ける川崎から和久井への業務引継ぎの日が予定せられておる為め、淡路町の浪宅の跡始末は母と愛子とに一任して私は新に知り合ひになつた和久井組の人々と共に急いで静岡に赴任したのである。当時東海道の鉄道は東に於ては京浜間に過ぎなかつたので、私等は神奈川で下車し其れから先きは乗合馬車や人力車に依るより外に仕方なく、東京出発が午後であつたとはいへ、途中二泊して三日目の晩に静岡に着いたやうに覚えて居る。さうして程なく愛子を中の店

魚峯方の借り二階に呼び迎へ、江川町の附属家に移つてから母にも来て貰ふた。

私が静岡に居ること二年許しの後、元來資力の豊かでない和久井氏は一時に手を広げた結果、前途の不安を感じるやうになつた為め、岡山の士族が池田家を背景にして立てて居た国立銀行の一重役、宮明信吾といふ人に其の俣譲り渡したが、此の人も融通意の如くならず中途、同じ銀行の取締役永島良幸氏が引受けることになつた。但し此の時は池田家の合扶達も永島氏の後楯となることになり、私共にも只管留任を求められた。此れ等の譲引きに付て終始肝煎役であつた平井氏からも此の際は是非とも留まつて呉れとの懇談もあり、旁々私は承諾はしたものの最初にも三十人計りの部下を率ゐて責任の衝に当らねはならぬことになるので、当時齡二十三、四の私としては随分大胆過ぎた決心をしたに相違なかつた。

私が引留めされるのを幸ひに、静岡を去らうとしなかつたには抑々故がある。それは其の頃県立中学校の英語教師にフイツゼラルド⁽²⁵⁾といふ人が聘せられた。同氏の妻は横浜の聖書会社で日本通として知られたエルマー〔(George Washington Elmer)〕氏の妹であつて、夫婦とも親切な人であつた故、私は伝手を求めて同氏の官宅、即ち城内にあつたクラーク〔(Edward Warren Clark)〕氏の旧邸に毎夜読本や会話本を携へて通学して居た。さうして日曜日などは私が弁当を用意して同氏夫婦を手近な景勝の場所へ案内などし、先方でも私共の許に来て日本食すらを喜び、私や愛子も洋風の家庭料理で招かれるやうな次第で、私の英語に対する興味が聊か出かけた所でもあつたので、若し事情が許すなならば暢気な田舎生活をして居る間に、晩学ながら時勢に後れぬ丈けの読書力を養ひたい欲望が肚裏に満ちて居つたからである。

フイツゼラルド氏は肺患の為め其の翌夏横浜で暑中休暇を過して居る時、病勢俄に革み遂に永眠せられた。その後に来た蘇国人にも就て学んで居たが以前から訳を附けて貰つて居た露木精一といふ人の紹介で、加奈太から派遣の宣教

(25) Maurice Fitzgerald ではないかと推測する(ユネスコ東アジア文化研究センター編『資料御雇外国人』小学館、1975、368頁)。

師にして医者なるドクトル、マクドナルド〔(Davidson MacDonaold)〕が時折静岡に来られるので、知り合ふやうになつた。同氏からは直接英語を教はることはなかつたが、同氏の夫人は日本女子を集めて小さいクラスを設けられたりした関係から、私等に対しても、何かと便宜を与へて呉れられた。私等は静岡でこんな生活をして居る間に小浜⁽²⁶⁾、栗子⁽²⁷⁾の二児を儲けた。

(16) 家を挙て東京に帰還す

1881(明治14)年春、頼三は東京に戻り、築地に居を構えた。彼は永田組の組織を銀行に改めることを提案したが、容れられなかったため退職した。

私は静岡の地に名残り惜かつたが、浮かりすると田舎に永住するやうな破目にならぬともいへぬ事情があつたので、永島氏と熟談の末、明治十四年の春遅く東京本店に転勤することになり、静岡支店の後任には島田組時代からの親友で、現に静岡支店の次席であつた宇野福三氏を薦め、これも其の通り決したので私は妻子を伴ふて静岡を引揚げ、当分は本店に程遠からぬ鍛冶町の某旅店に滞留して専ら住宅を探し廻つた結果が、近年まで所有して居た築地河岸の家屋を買受けて、これに移り住むことになつた。私等が住宅を築地に撰んだのは中橋和泉町にあつた店への通勤に便なのと、築地居留地には前記のマクドナルド氏始め加奈太伝道会社から派遣の人達が居を構へて、伝道の余暇バイブル、クラスなどを設けて来者拒まずといふ有様な為であつた。今一つは新富座の全盛時代で団菊左の芝居が容易に観られる望みがあつた故にも由る。私は幼年の時から母や叔母の仕込みで芝居は人並み以上に好きであつた所へ、愛子が南を向けは道頓堀を覗かねは気が済まぬ程の熱心者であつた為め、兩人とも地の利に惚れ込んで有無なく築地と極めたのであつた。

(26) 1878(明治11)年4月生まれ。佐伯安に嫁す(内尾直二編『人事興信録〔第2版〕』人事興信所、1908、589頁)。

(27) 1881(明治14)年2月生まれ。大八木義雄に嫁す(同上)。

さて私は東京に落ち着いた後、先輩の意見も叩き自分でも種々考へて見て、早晚店の組織を銀行に改めるのが最善の道と信し一、二の案を立てて永島氏を説いた所、不幸にして同意を得ぬばかりか、却て誤解を招く始末となり、其の間同氏の水臭さも分つたので私も気を腐らして此の年の暮れを限りとし奇麗に同氏と事業関係に於ては手を別つこととなつた。

(17) 瘦浪人の読書三昧

1882（明治15）年、再び浪人となった頼三は、築地に住む外国人たちから英語を学び、特に、デヴィッドソン・マクドナルド、チャールズ・S・イビー、マーサ・J・カトーマルといった、カナダ・メソジスト教会の人びとと交流を深めた。大阪に戻った母は小商いを始めたが、これが思いの外大当たりした。心臓病を患っていた妻の父・奥田恒七は、頼三のすすめでマクドナルドの治療を受けて一時回復したが、1884（明治17）年1月に長男松之助が生まれた後、病状が悪化し亡くなった。

私は明治十五年の正月から復た浪人となつた、志かし幸ひ聊かの儲蓄もあつたので、此の時こそはの意気込みで、居留地通ひを励んだのである。当時居留地は各国人が軒を並へて住んで居て宛なから外国へでも行つたやうな感があつた。私の出入先きは静岡以来馴染のマクドナルド氏を始めカックラン〔(George L. Cochran)〕、ミーチャム〔(George Marsden Meacham)〕、イビー〔(Charles Samuel Eby)〕などの諸氏、即ち加奈太メソヂスト派から遣された人々の住んで居る明石町四番館及び五番館であつた。此れ等の人々は伝道の傍ら有志を会めて聖書研究の名の下に英語を教へて居た。殊にマクドナルド氏は医術施薬を以て多数の邦人に其の徳を仰かれて居た。カックラン氏も才学の優れた長者、ミーチャム氏は能文を以て京浜の間に重きを成し、イビー氏は雄弁と日本語に熟達するの故を以て聞えた人、同氏の明治会堂（即ち後の厚生館）に於ける東京演説と題する講演は数回に亙り我が知識階級に大なる反響を与へた。

其の頃イビー氏はクリサ〔ン〕セマムと題する英文雑誌を董刊して居た所から、私にも稽古の爲めといふことで日本の能狂言の有名なものの荒筋を英文にして見よといはれ、覚束なくも毎日同氏の書斎に通ひ手伝つたのやら、邪魔したのやら分らず仕舞ひになつたが兎も角私の書いたものが活字になつたこともある。私が佐藤顕理氏に出稽古を頼んだのも其の頃で、これは書物抜きの自由会話であつたが、耳も口も思ふやうに働かず西洋人に対するよりも遙に苦しかつた。

当時の宣教師には立派な人が多かつたやうに思はれる。私の接した中でもマクドナルド先生の如きは希に観る君子人で、大の日本蟲屑であつた。先生は日露戦争中郷里のトロントで頓死せられたが、それが丁度旅順開城の新聞が彼地で出た瞬間で、旅順開城日本勝利を叫び、室内を狂舞しつつ倒れて縊切れたといふことである。その他私の築地時代に加奈太から派遣せられた人物中にホキチングトン〔(Robert Whittington)〕、サンビー〔(John William Saunby)〕、オドテム〔(Edward Odum)〕、カツキング等の尊敬すべき好紳士があつた。

又婦人側でも宣教師の内君連はそれぞれの働きをして居たが、何分主婦の勤めもあるので思ふやうにも成らなかつたらうが、少々後に來たミス、カートメル〔(Martha J. Cartmell)〕の如きは専心福音の為に働かれたのである。同嬢は柔和にして同情に富める女らしい女であつた。麻布の東洋英和女学校の始を成したのも実に彼女であつた。志かし学校経営といふ如き表立つた仕事は余り適任と考へて居られなかつたらしい、彼女は聖書を其のまま実行して、天地にも代へ難い一人の魂を救ふことを本願として少数の日本婦人の間に福音の播種を志したのであつた。されは女学校の経営は専ら手腕家のミス、スペンサー〔(Eliza Jane Spencer)〕(後のラージ夫人)に任せた。まだ華族女学校も、虎の門の女学館も創立せられなかつた当時の東洋英和女学校は隆々の勢ひであつたことはいふまでもない。

ミス、カートメルは今はハミルトンの閑居に老を養ひつつあるが、日独戦争中他日青島還附の帝国の声明を新聞紙で承知したが此の声明は必ず日本が履行することを信じて疑はぬと態々言つて來た位ゐ、常に日本に対する注意と深切

を遣れず、昨年の万国日曜学校大会の時も日本の遣り方を非常に喜んだ手紙が来た。大会の代表者中に嬢の親類なる某女といふがあつて、嬢から是非東京滞在中に昔し別懇であつた人々の消息を聞いて来て呉れといふ依頼があつた由で、一日私等夫婦も英和女学校に集つて某女に面会し今、京浜間に住んで居る往時のカートメリアン、ビリーバーと他から呼はれた人々と共に双方の近情を語り合ふことを得た。私等も別後三十年、時折りの音信を続けて居るのは実に嬢一人である。

話が少し前に戻るが、和久井氏が静岡県為替方の業を永島氏へ譲渡した頃、静岡に居た母は大阪に帰り、奥田の父と相談の上、ほんの小遣取りの積りで店庭の一隅に造化を加へ、東京から下駄傘、後には足袋までも取寄せて小商売を始めた所、是れが思ひの外の大当りで、私が築地に浪人して居る時分でも別に母の生活費を送らずに済み、却て常に母の方から送金して貰ふやうな次第であつた。

奥田の父は其の前から心臓病で大坂病院にも入つたが兎角経過が思はしくなかつたが、去り迎安静にばかりして居るにも及はぬ程度なので、保養旁々久方振りに東上を思ひ立ち十五年の春、海路を択んで築地の宅に来られたので、早速マクドナルド先生の診療を乞ふた所、不思議に効験顕はれ、父は日増に元気付き私の母を相伴として毎日気任せに町々の見物を済ませ、夏の初、母を促して興に東海道を下り伊勢参宮までして帰坂せられた。その翌十七年一月長男松之助の生れたのを非常に喜び、父は同し冬、痼疾再び重り終に不帰の客となられた。

因に。奥田家は歌子が相続したが、他に男手もない所から、明治二十八年大坂を引払ひ母ときみ子を携へ東京へ移住することになった。

(18) 初て腰弁の仲間入り

1882（明治15）年夏、頼三は官界入りした。元々金融業界に身を置いていた彼は、静岡時代に培った人脈を頼りに日本銀行への就職を望んだがうまくいかず、参事院議官補の大森鐘一（幕臣の子）らの口添えにより参事院書記生となった。参事院での仕事は、議事の筆記や大森らの補助など容易なものが多く、多くの時間を読書に費やすことができた。

私は明治十五年から能ふ限り時間を読書に過さんとして居た其の年の暮、図らずも従来職業とは方角違いの官界に身を置くことになり、それが意外にも長い年月の間続いたことを述べる順序として、伊東巳代治子爵と私との関係から説かねはならぬと思ふ。私が伊東子と知り合ひになつたのは明治十三、四年の事であつた。尤も私は最初から官界に何の欲望があつた已けでない、唯々友人の布施議氏、当時静岡県の一課長に過ぎぬ人であるが、伊東子と相善く、常に私にも子の才能を褒めちぎつて、是非其の内に面会して懇意になつて置けと勧めて呉れた。但し私は大坂以来長崎連中に多少の近付きがあつたので、伊東子の希らしい才物であることを承知して居た。それで偶々布施氏と私とが中安であつたか、菊隅であつたか確かな記憶はないが、兎に角日本橋の料理屋で食事をして居る時、伊東子も他席に来合はして居られることが分かつて、布施氏の紹介で面会したのが最初である。志かし其の後も普通の交際を続けて居ただけで勿論、身分の相談などを出したことはなかつたのである。

所で明治十五年の春、〔参議〕伊藤公が憲法取調の爲め欧羅巴に遣されることになり、〔参事院議官補〕伊東子も随員の一人になられたから、仮令私に役人の端になつて見たい気が出て、同子の帰朝を待て兎も角相談すべき筋道であるのに、同子の留守中、志かも年末御用仕舞の真際参事院書記生（十四等官相当月俸貳拾五円）の辞令を清浦〔奎吾〕書記官の手から頂戴するやうなことになつた次第は、私は元来役人向きの何等経験もなく又前途進級を期するほどの自信のないことは勿論、若し大銀行のやうな舞台ならば懸命に働いて見たい希望

を布施氏に論じたことはあつたので、同氏は私の長籠城を案して誰かに頼んで吉原〔重俊〕総裁時代の日本銀行へ申込んで呉れたさうなが、其の方が捗々しく運はなんだ所から同氏は私に仕官を勧め、伊東子の同僚で静岡県人なる〔参事院議官補〕大森氏（鐘一男）外に中山〔寛六郎〕、落合〔済三〕の両氏を差添役として薦めて呉れたのが存外早く極つて、私は年の暮に参事院へ採用せられたのである。私は本筋の学問もせず官歴も持たぬ所から勤め向きに付ても自ら危んだが兎に角、事の極つた以上は一生懸命に勤める気になつたのである。築地から赤坂御用までは可なりの道法りであるが、大抵徒歩で通つた。拜命の当日辞令を渡されたのは伊東子の次位に居た清浦権大書記官（今の子爵）であつた。

翌十六年の一月御用始に出勤して見たら思ひ設けず、静岡時代に知り合ひの大江孝之氏（敬香）や大石勉吉氏が共に判任御用掛となつて納まつて居るのに出会つた。これも多分大森少書記官の推挙であらう。私は早速話相手を得たばかりでなく、色々の書籍を記録から借り出して耽読する便宜を得た。さうして勤務は私が取り越し苦労したやうなものでなく、至て容易しいので、私に取つては月給を貰つて学校へでも通つて居るやうな心地がした。当時の議長は山縣〔有朋〕公、副議長は田中子（不二麿）で、議官、議官補中には後年の大臣次官級の人が多数居られた。私の役目は本会議の時、議事の筆記をしたり、種々の文案を立て、内局の書記官（大森、中山両氏の外久保田貫一氏が居た）に差出す位のもので平生は極めて閑散であつただけに、時間の多くは読書三昧に過すことが出来た。尤も記録から望みの書物を借り出し得たからである。

(19) 伊東子と公務関係始まる

1883（明治16）年8月、「憲法調査」のために渡欧していた参議・伊藤博文の一行が帰国した。他の官員同様、横浜で彼らを出迎えた頼三は、旧知の参事院議官補・伊東巳代治と再会し、仕事を手伝うよう依頼された。翌日より伊東の自宅に「出勤」し、持ち帰った書類等の整理を手伝った。秋になり、伊藤は憲法調査の成果をまとめるために、宮中に制度取調局を設置することを決めた。

歐洲に派遣せられた伊藤公の一行は十六年の八月中旬重大な使命を果して無事帰朝せられるといふので、当日は奏任以上の官員は何処の役所も半空の明の有様で横浜に出懸けた。私も同しく飛出して伊東子を波止場に迎へたが、私は一別以来絶えて文通をしなかつた為め、先方では私をやはり前垂れ掛の男と見て居て役人の端くれ、而かも参事院の書記生とは露氣付かれる筈もなく、応対甚た変んであつたから、私は言葉短かに身の成り行きを話すと、同子は手を拍て妙々と呼び何にせよ明日から僕の宅へ出勤して呉れといはれて其の日は別れた。

翌日約の如く一番町の同子の宅（小磯の地所内）へ行つて見ると、書籍やノートブックで満ちて居る数個のトランクを開いたばかりの名で、当分この整理の手伝ひをして呉れといはれ、夫れも役人奉公の稽古にならうと思ひ、毎日役所へ出る代りに同子の宅へ通つた。素人の私は一切不案内で役所の方はその俣にして平気で居た所、伊東子から龍居には宅調べがさせてあると内局へ届けたといふことである。斯うして置かぬと欠勤と見られ進級にも障ると後ちに同僚の古狸に説き聞かされ、大笑ひしたこともある。

兎に角、同僚の甲乙は暑中休暇といふ私には耳新しい長休みに手足を伸して居る時、日曜もなければ時間にも構はず、毎日朝から晩まで伊東邸に詰め切りの姿で、息もつかずに片付けものの手伝ひをした。他の随員も各自の宅で書類整理をして居たが其の分量は伊東子の許にあるものとは比較ならぬ程少かつた。彼れ此れして秋の中頃になつた時分、伊藤公が招聘した独逸人テヒヨ-

〔(Eduard Hermann Robert Techow)〕氏が一番乗りをして来る始末なので、公は各自の手許調べでは埒が明かぬから一機関を宮中の何処かに設けることにしようといはれた。それが即ち制度取調局である。

(20) 制度取調局時代

1884（明治17）年3月に設置された制度取調局には、井上毅、伊東巳代治、金子堅太郎といった伊藤の麾下が集められた。伊東の秘書的役割を果たしていた頼三もこれに加わった。制度取調局には、寺島宗則、鹽田三郎、陸羯南、今村研介、本山正久、和田正脩、國友重章、奥田義人といった多彩な顔触れが揃い、いつも議論に花が咲いた。

翌十七年参事院は廃せられ、⁽²⁸⁾制度取調局が出来たので、憲法取調に関係のある人は対外籍を太政官に置くことになり、取調局の方では正副総裁の外は勅奏判任を通して皆御用掛といふことになり、私は此の時等級を飛して呉れて太政官何等属とかの本官で、制度取調局御用掛の辞令を貰った。取調局の総裁は帰朝後世間の噂を裏切り政治舞台から隠れて宮内卿となつた伊藤公、副総裁は外務卿として令聞のあつた〔宮内省出仕〕寺島伯（宗則）であり、勅任御用掛には〔参事院議官〕塩田三郎氏の如き江戸兎肌の人もあつたが、終始この仕事に骨を切られたのは〔参事院議官〕井上（毅）〔、参事院議官補〕伊東〔巳代治〕、〔太政官大書記官〕金子〔堅太郎〕、曾祢⁽²⁹⁾〔荒助〕など藤公直参の諸氏であつたことはいふまでもない。

私等判任仲間でも各方面から選抜せられただけあつて相応の人物が居た。後年「日本」新聞二健筆を揮つた一代の文才陸実氏〔太政官御用掛准判任〕や、検事となつて逝いた旧い独逸学者の今村研介氏〔太政官一等属〕、英語の達者な

(28) 参事院が廃止されたのは、内閣制度が導入された1885（明治18）年12月である。

(29) 曾祢は制度取調局御用掛には任ぜられていないようである。

法学士本山正久氏〔太政官一等属〕、政治家自任の和田正脩氏〔太政官御用掛准判任〕、国士気取りの國友重章氏〔太政官御用掛准判任〕など人数は少かつたが猛者揃ひであつた。その上晩年男爵を授けられた奥田義人氏〔太政官准判任〕も此の年の夏、角帽制服を脱いだばかりで取調局に入り月俸五拾円の判任御用掛になつた。それ故私共の室内でも議論に花が咲いて上局の方から静にせよの一喝を吃ふことは度々であつた。

当時會議室に充てられてあつた一棟は後年取崩しの時、先帝の御思召を以て伊藤公に賜つたので、公は之を大井の邸内に移し恩賜館と名けて大切に保存して居られたが、公の歿後宮内省へ返納することになり、今は青山権田原の一隅に憲法記念館と榜して移されてある。

(21) 京城の騒きから天津談判

1884（明治17）年冬、甲申事變が起こり、その処理のために伊藤が特派全權大使として派遣されることになった。伊東巳代治の秘書を務めていた頼三も一員に加わった。頼三は、天津における伊藤と李鴻章との間の談判筆記（「天津談判筆記」）や復命書を纏める業務に従事し、このときの働きにより、伊藤にも認められるようになった。

私等が暢気に役人生活を局内に続けて居た十七年の冬、日韓兵の衝突から転じて日清軍隊の接伏といふ大騒動が起り、韓兵は勿論、清兵の先鋒となつて共に我兵に発砲し我兵は止むなく之に応戦しただけの筋合であるが、当時の韓兵は事大思想に捉はれて居たから我は頗る不利の地位に在つたので、我が竹添〔進一郎〕公使の如きも終に身を以て免れた程である。そこで我は韓国の罪を問はねはならぬと同時に、東洋永遠の平和の為に禍根を絶つべき手段を清国に向けて講せねはならず、朝野の議論は喧しいものであつたが、結局清国との談判は伊藤公を特派大使として北京に遣し、帝国の面目を全うすると共に、韓国の独立を確認せしむることに廟議一決したのは年を越えた十八年の一月始めであつた。

伊藤公は自己の意見を内閣に致して置いて、年末から越年まで熱海に赴き樋口旅館に滞留して居られたから、伊東子は公の蹶起を促す為め新年早々同地に急行せられ、私も跟いて行つて十日余り同宿して居た。その内に伊藤公は悠々自適の体を粧ひつつ窃に国際関係や政府の最後の注文までも講究せられて居たやうであつた。公の決心が定まるや否、伊東子は公よりも先発して帰京することになり、それからは私等も昼夜兼行で色々の準備に忙殺されたのである。

藤公の特派大使といふことが決定すると直に一行の顔触れも極まつた。⁽³⁰⁾すなはち副使格の「参議兼農商務大臣」西郷〔従道〕侯を始め陸軍からは〔陸軍少将〕野津〔道貫〕、海軍からは〔海軍少将〕仁礼〔景範〕の両氏が随行することになり、後年大將に陞つた連中（陸軍の〔陸軍少佐〕土屋〔光春〕、〔陸軍大尉〕山根〔武亮〕、〔陸軍大尉〕福島〔安正〕、〔陸軍中尉〕神尾〔光臣〕の諸氏の如き）が佐官や尉官で随員に加はり、文官側では公の幕僚たる〔参事院議官〕井上毅〔、太政官大書記官〕伊東子の両子を筆頭に〔外務権大書記官〕鄭（永寧）〔、外務御用掛〕花房（直三郎）や外に〔太政官権少書記官〕牧野〔伸顕〕子も加はり、宮内省からは〔宮内少書記官〕^{〔高〕}五辻〔修長〕子、警視庁から〔一等警視〕佐和正子なども來た。〔農商務権少書記官〕河上謹一氏も西郷侯の秘書官として同船であつた。私と〔太政官属〕⁽³¹⁾故島田萬氏とは伊東子の直属で人一倍の多忙さであつた。乗船は共同運輸会社（後ち日本郵船会社に合併す）の薩摩丸で二月廿八日横浜から出発した。同社からは園田実徳、佐々木男也の二氏を接伴役として乗船せしめ、又従者名義で西郷侯の〔実業家〕福島良助氏、井上子の〔実業家〕眞島襄一郎氏の如き相応の人物が数名同船したのであつた。

かくて船は悠々と神戸長崎を経て芝罘に安着した。それは白河の解氷の模様が分らぬので先づ錨を芝罘に卸し、確実な報告を得て前進せん為めであつて、私等も二日間芝罘で休息することが出来た。尤も賤食は本船でするのである

(30) この段落の校註には、龍居頼三「北京の今昔」東洋学報（231）（1917）37頁を使用した。

(31) 「属島田万」国立公文書館所蔵『枢密院文書・枢密院判任官以下転免履歴書・明治』（枢00190100）。

が、度々上陸して支那店を素見することが出来た。薩摩丸はたしか三千噸位みの船であつたが、それでも白河を溯航すること氣遣ひ、別に千噸余りの駿河丸を伴船として連れて行つたのである。今日ならば新聞記者の天津行きは非常な数にもなろうが、當時に在ては東京日々の福地桜痴、時事の渡辺治、報知の森田思軒の三氏が出懸けただけであつた。但し外国人側では隨行の独逸人ロエスレル〔(Karl Friedrich Hermann Roesler)〕、米人のジョードン〔(Peyton Jaudon)〕両氏は別としてタイムスの通信を兼ねて居たジヤパン、メールプリンクリー〔(Jack Ronald Brinkley)〕氏、新聞通信に係のあつたストーン〔(William Henry Stone)〕氏が同船して居た。

一行が太沽へ着いた時、李鴻章(直隸總督兼北洋通商大臣)から逸早く出迎の小汽船を來させた。それには羅豐祿といふ米国仕込みの英語に巧みな秘書官格の男が乗つて居て、李鴻章の口上を齎したので、公始め巨頭連中は直ぐに其船に移られた。私等は手荷物の宰領しながら駿河丸に乗つて支那の曳船に牽かれて白河の九十九曲りを溯るので、殊の外時間がかかり空腹を水兵の麵麴で医しつつ薄暮我が領事館前の岸に着いた。多分半日以上も費したやうに記憶する。さうして伊藤公、伊東子を始め私等七八人は領事館の厄介になり、其の他はカストルハウス、グローブホテル、乃至支那旅館の永和棧などへ分宿することになった。當時の領事は私と同齡三十歳の原敬氏で、書記生には鄭永昌、呉啓太等の諸氏が居た。

公は早速李督に面会せられたが、李には北京から何の訓令も來て居らぬので、公は天津をそこそこに切り上げ、当初の計画通り北京に乗り込み堂々と談判することに極められた。但し李鴻章は公に晋京せられても迎も急に埒は明かず、最後は自分に全權の命が下るであらうと笑ひながら語つたさうな。當時はまだ京津間に鉄道はなく、剩へ小汽船でも紫竹林から上へ進むこと許されないもので、陸路を支那馬車で揺られながら行くか、左もなければ曳船で白河研るのである。船の方は樂な代りに通州まで二日を要する始末。伊東子は天津に着いた晩から風氣であつたので、私等と共に曳船を雇ふことになり、通州上陸後、支那馬車にゆられ乍ら北京に入場したが半日位みはかかつたやうに覚える。天

津から白河を曳船で行く様は昔の淀川通ひの三十石船其のままで、通州は宛なから伏見に当るやうな気がした。

北京でも公以下我々は公使館に居候することになった。公使館といつても今、本願寺の別院になつて居る六條胡同の小さな建物であるから、我々はほんの共同事務室と寝部屋を借りたに過ぎなかつた。時の公使は榎本武揚子で、書記官には古い英学者の島田胤則、書記生には漢学者の中島雄、渡部 〔與一郎〕⁽³²⁾ 某などの諸氏が居た。又公使館附武官としては梶山少佐（鼎介）も居た。公は早速榎本公使を同道して総理衙門を訪ひ、慶郡王（後の親王）以下の大臣に会つて使命の趣を告げ、鄭氏の支那語を通して談判の端を開かんとせられたが、第一先方の全権が極まつて居ない。彼一語、我一語は畢竟水掛論になる恐れあることを看取せられたので、公は話を中止して自分と同一の全権を有する人を出して呉れと真向から要求せられた。そこで李鴻章が察しの通り中央政府内では散々責任を避け合つた揚句、李に全権を授けて公と折衝せしめることになったので、一行は一週日の北京滞留で、ろくろく市中の見物もせず其のまま天津へ引返しただのであつた。

夫れから再び天津領事館の客となつて、公は早速李に面会して互に全権を照し合ふた上、領事館と紫竹林の衙門との間を交互に往来して談判を進めることに極まつたのである。さて談判の初頭に於ての難問題は双方とも先づ発砲したものは貴国の兵である。我は止むを得ず自衛的に応戦したに過ぎぬといふ主張であつた。此の根本の非曲を認めさせるべく公は全力を尽されたが、彼も去る者飽くまで己れを直とせんとするので、公は中頃に至り此の上は米国の仲裁でも求むへきかと謎をかけた。若し今日の支那などは思ふ壺へ来たと舌を吐くであらうが、当時在ては若し米国の扱ひでも入らは支那は勢ひ不利の地位に立たねはならぬので、まあまあ両国の事は万国で始末するが当然と李は軽く抜けたのである。志かし戯談でなく一時は日本を素通りして此のまま米国に行くかも知れぬといはれ、私等は米国行きは更に面白しなど話し合つたのである。

(32) 『改正官員録 明治17年12月上』博公書院、30頁。

李督は仮りにも曲直論で譲つたら日本のことなれば屹度償金を払へと二の矢が飛んで来ると想像して居たらしかつた。ところが公は支那の誤まつた宗主権を朝鮮から奇麗に抛たせるのが主眼であつたから、金銭問題の如きは最初から余り考慮の中には入れて居られなかつた。李の方でも段々公の大局論に傾いて来て結局罰金附でさへなくは北京に対し自己の立ち場を作るに、左呈の不利もあるまいと纏める気になつたらしかつた。其の間には迂余曲折のあつたことは勿論であるが、公は障りのない文字の上で彼の面目も幾分立てるやうに心配し、対韓関係に於ては根本的証文を握られたのであつた。当時国内でも多少の償金を期待して居た人々のあつたことは公の竊に懸念する所であつたが、何等物質的土産なしに帰朝した公に対し、各方面で歓迎したことに付ては衷心満足の色が見えた。

天津に於ける談判の用語ハ英語といふことに申合せ、李の為には伍廷芳が通訳の任に当り我が西郷侯と彼の呉大徴とは毎会列席した。さうして筆記は双方で作り別にプロトコールのやうな形式は取らなかつた。我が方では伊東子が一人で引受け、会議が終るが否や別室に待構へて居る私共を相手に其の都度整理することになつて居た。同時に英文の方はジョードン氏が専ら仕上げに任し、和文は伊東子の口訳で私が稿を纏めたのである。一行の帰朝後秘密扱で印刷せられた和英両文の「天津談判筆記」と題するものが即ちそれである。外に特派大使の復命書がある。是れは一行が天津を発する前、伊東子が藤公の旨を承けて大意を私に授けられた故、私は筆記取纏めと同時に稿を起して見たが、船が渤海を駛り出した時分に漸く書き上げることが出来たので、私は夫れを伊東子の手に渡して加筆を請ひおき其のまま六連島近くに来るまで昼夜打通して寝て仕舞つた。実に二週間は夫れを兼行で押し通した疲労の報ひに余儀なくせられたのである。志かし私が公に認められたのは多分この時頃からであらうと思ふ。

一行が天津から帰つたのは四月の末、牧野子と〔外務一等属⁽³³⁾〕松延〔玪〕氏

(33) 「一等属松延玪御用掛ニ昇級清国在勤被命ノ件」国立公文書館所蔵『公文録・明治十八年・第百六十二巻・明治十八年一月～五月・官吏進退（外務省）』（公04057100）。

は公の内命で朝鮮に廻つた為め、帰京が少しく後れた。洪澤子等の催に係る不忍池畔の公の歓迎会は極めて盛大であつた。私等の為に公が主人となつて向島の大倉別荘で慰労会を催された時分は、皆が夢にみて居た墨堤の花は既に謝し去つて新緑の眺めに心目を喜ばせる頃であつた。

明治も早や十八年になつて居ても、天津にはまだ一軒の日本商館もなかつた。それで公は帰朝後頻りに三井や大倉に出店を勧められたのは、今日聞けば嘘のやうな事実である。当時三井筋の佐々木某といふ人が支那政府へ銅の売込みとかの為に、天津に腰を卸して居た外は、日本人といへば神戸、長崎あたりから尾いて行つた支那人の妻妾に過ぎなかつた。私等も浮か浮か単身で買物にでも出懸けると忽ち支那の子供群が「東洋鬼」と囃し立てて遠巻きにする。時としてはは周囲に集まつた悪童の為にポケットまで調べられた。其の上支那犬からは消魂ましく吠えられるのが常であつた。天津已にかくの如し、北京の更に甚しかつたことは迎も今日想像の出来ぬ位であつた。

(22) 伊藤内閣成立から憲法発布

1885（明治18）年12月、太政官制に代わり内閣制度が立てられ、伊藤が最初の総理大臣となった。頼三も彼の下で業務に邁進し、多忙な日々を過した。1888（明治21）年、枢密院が創設され、頼三を含む制度取調局関係の人々は同院に移った。1889（明治22）年の憲法発布後、各地に演説に赴く伊藤に同行した。また1891（明治24）年の大津事件の際には、内閣書記官長の伊東巳代治に従って京都へ赴いた。

私は帰朝後依然として制度取調局を勤め所として居たが、其の実伊東子の専属の姿で、何呉れとなく子の手伝ひをして居た。此の秋の末頃から弥々憲法実施の準備の幕に移ることになつて、聡明な三條〔実美〕太政大臣が十二月某日長文の奏議を上られた結果として、太政官が廃せられた。是れまでは唯々称へて居た内閣が太政官に代つて政治の最高機関となり、乃ち伊藤公が最初の内閣

総理大臣に任せられ、各省の卿は悉く某々大臣と改まり、條公は宮中に入つて内大臣となられた。伊藤内閣の最初の事業として施政方針や文官試験規則が生れ、各省の官制などが引続いて一新せられるので、臨時官制審査委員が出来、私も書記の辞令を貰ふたのである。

十八年の暮、第一次伊藤内閣の出来た自分の我々の忙しかつたことは、此の春の天津談判の時に譲らず連宵打つ通しで筆耕をやつた。時には公自身も椅子を離れて絨毯の上に安坐し、私等と共に校正の手伝ひなどせられ、弘暎梅子夫人がおじや鍋を運んで給仕せられる騒きであつた。かかる場合に伊東子の精力は実に驚くべきものがあつて、一切万事予定の時日を誤らずして取運はれたのであつた。

永田町の首相官邸構内にあつた別館は今取毀れて跡を留めぬが、其の頃ハ一般に永田町の官舎と呼ばれ、憲法取調に関係ある人々の詰め所になつて居た。階上は独逸人のロエスレル博士始め、新に聘したテヒヨー、ルードルフ (Otto Rudorff) 氏等の室に充てられ、階下は伊東、金子、曾祢の三氏は常勤の姿で、井上 (穀) 子も不定に出勤せられ、其の外書記官達では今の牧野宮相、山縣〔伊三郎〕関東長官や渡辺 (廉吉) 荒川 (邦蔵) 花房 (直三郎) などの人々が居られた。米人のジョードン氏も階下の一室に坐を占め、仍ほ我々の仲間も四五名居つたので中々の賑かさであつた。

憲法其の他の草案が纏まつた所で枢密院が創設せられ、制度取調局関係の人々は多く同院に移されることになつた。時に明治二十一年。議長はいふまでもなく藤公が引受け、当代一流の人々を顧問官として集めた。内閣の方は黒田〔清隆〕伯が後継者となつた。そこで私も〔枢密院書記官〕伊東子に附いて一属官として枢密院に勤務することになつた。

憲法は本会議毎に臨御を仰いで慎重に議定せられ、万事の手続きを尽して明治二十二年の紀元節を以て發布せられたが、私等は当日、前年の暮から伊東子総指揮の下に、印刷局に詰め切り度々徹夜して漸く出来上つた和英兩文の憲法其の他の印刷物を携へて御式場近くに控て居た、その為め森〔有礼〕文相の遭難のことも帰宅後承知して打驚いたやうな次第であつた。

藤公は憲法発布後、方々から講話を請はれるままに華族会館（其の頃は上野）を振り出しに、数箇所ですべて講話せられ、私は毎も筆記役に引き出されたが後年、公が地方漫遊の時の演説は東京日日新聞から集めて出版したが、是れは多く高木信威氏の筆記したものである。

此の項の末に一筆加へ置きたいのは、二十四年の大津事件、即ち露皇太子（後の廃帝）が巡査津田某^{〔三歳〕}の為に負傷せられた時の騒ぎである。当日元老大臣始め大官達は内閣に馳せ付け善後の評議に夜を明かし、先帝には翌早朝特別列車に召されて京都へ幸したまひ、停車場より直に露皇儲をホテルに御見舞ひあらせられた。其の又翌日は乗艦帰国せられる露皇儲を神戸に御見送り遊された程であつて、一時世界の震駭は外常のものであつた。私は此の時も〔内閣書記官長〕伊東子の随員として京都に赴き木屋町の大可憐に逗留した。副島〔種臣〕枢問官其の他の巨頭が多数同宿せられたのであつた。

(23) 日清戦争の時代⁽³⁴⁾

1894（明治27）年、日清戦争が始まった。大本營が広島に置かれ、首相の伊藤や内閣書記官長の伊東にしたがって頼三も広島に滞在することとなった。1895（明治28）年3月、李鴻章が欽差大臣として下関に派遣されて講和会議が始まった。下関にも同行した頼三は、さらに批准書交換のために全権弁理大臣に任ぜられた伊東らとともに芝罘を訪れた。下関での李狙撃に対する報復のおそれがあったため、伊藤は頼三たちに身の危険が生じるかもしれないが、残された家族の面倒は見るので安心せよとの訓令を行った。

明治二十七年の夏六月、朝鮮問題から日清両国の間に戦争が起つた。九月五日大轟を広島に進められることになり、伊藤首相以下の人々私共に至るまで、

(34) この項の校註には、田保橋潔『日清戦役外交史の研究』刀江書院（1951）を使用した。

御召列車の末隅に加つて東京を發し、広島の内閣出張所に充てられてある三町目の三好旅館に落ち着いた。公は鮫島〔武之助〕秘書官と共に階上に陣取られ、⁽³⁵⁾ 翰長の伊東子や私共は階下に室を得たのである。公附きとして〔内閣属〕⁽³⁵⁾ 塊南〔森泰二郎〕、錦山〔矢土勝之〕の両詩人も居れば、メール記者の頭本元貞氏や米国から帰りたての佐藤顕理氏も同宿して居て相当賑かな上に、戦報は大勝利ばかりで、我々の十五番室の如き陽気いはん方なしであつた。

清国は初めこそ色々の情報に誤られたり、自負高慢で傲然と構へて居たらうが、追々連戦連敗の真相を知るに及んで狼狽し始めた見え、半は探りを入れる意味もあつたらしく、〔戸部左侍郎〕張蔭桓、〔署理湖南巡撫〕⁽³⁵⁾ 友召濂の二人を全権とし〔天津海關稅務司〕デットリング？（Gustaf detring）を附添として広島に來させたが、彼の有する全権なるものは國際普通の体に適はざるのみならず、一切が和を請ふ誠意あるものとは認められぬので、体なく論して回らしめた所から、北京政府も目が覺めて翌、二十八年三月には李鴻章が更に全権となつて伍廷芳等も引具して馬関に來ることになつた。

そこで我方でも公及び〔外務大臣〕陸奧伯を全権として馬関に遣され春帆楼の二階広間に於いて講和會議を開くことになつた。私も広島から伊東伯に附いて同地に行き、阿弥陀寺町の茶勘といふ家に泊つて居たが、會議の筆記は専ら外務省連中で引受けたゆゑ、私は伊東子の手許用を弁したに過ぎず、寧ろ閑散なのに退屈した位であつた。

談判が大分進捗して休戦条件に及ぼうといふ際、李全権が春帆楼から旅館に充ててあつた迎接寺への帰り路、小山某⁽³⁵⁾の為に狙撃せられた騒きて、會議の方は一時中止となり、公も広島へ引返して石黒〔忠恵〕軍医總監や佐藤進博士が馬関に急行して手当を施した所、幸に李の負傷は重からず、程なく押して會議にも出られるやうになつたので、公以下も再び同地に臨み先づ休戦条件拋棄の雅量を示し、且つ講和条件に於ても幾分相手方の面目も立てて遣つたので、漸

(35) 「内閣属矢土勝之外五名大本營所在地へ出張ヲ命スルノ件」国立公文書館所蔵『任免裁可書・明治二十七年・任免卷二十二・内閣判任以下』（任B00051100）。

く調印まで纏つたのである。

両国全権の間に調印の済んだ所謂下関条約は五月八日を期して芝罘で批准交換を行ふことになった。そこで我方では伊東子が特派全権大使に任せられた。私も〔外務省参事官〕西源四郎、〔公使館書記官〕鄭永昌、〔通訳官〕植原陳政、佐藤顕理の諸子と共に随行することに極つたので、一行は一と先つ広島を出てて既に行在所となつて居た京都へ上ることになり、其の道すがら、伊東子以下私共は舞子に宿泊中であつた公及び陸奥伯から訓令を受けることになった。その時公は陸奥伯に列坐させて一同に向ひ、此の度の御用の軽からぬことを言ひ付けられた末、出先きに於て各々一身に如何やうのことありとも家族の始末は兩人にて慥かに引受くるに由り、其の迹の事は安心せよといはれた。それは当時李の遭難を憤つて機会あらは報ひ呉れんといふ人氣が芝罘辺に沸き立つて居たからであらう。

伊東大使の乗船は八重山船で、船長は平山大佐（藤次郎）であつた。一行が途中で得た各方面の情報に依ると芝罘には露国の艦隊が先着して居て、我々に喧嘩を売るべく待構へて居るから用心せよといふ意味のものであつた。船中で伊東子は然らば裏を搔いて丸腰で乗り込もうではないかといわれ、仮初めにも軍艦と銘打つた八重山では場合に依ては砲門を開かぬ訳にもゆかぬから是れは旅順に止め、無武装の一商船横浜丸に転乗して別に通信用の爲め小さい肥後丸を伴れて行くことになった。当時旅順の大総督府に居た村田砲兵中佐（後の惇中将）も一行に加つた。海軍側からも野間口〔兼雄〕、山縣〔文蔵〕など後の将官たる人々が同しく旅順から便乗した。

さて芝罘談判の模様を書けば長くなるから略すこととするが、清国の全権は伍廷芳と聯芳の兩人であつて、彼等は已に露独仏の三国から干涉の香を嗅いで居た故、種々辞を構へて批准交換の時を延さうとばかりかかつたが、伊東子は巧に折衝して其の手に乗らず、漸く彼等を説き伏せて期限当日の夜十二時に至り彼の批准書を握ることを得た。我々は批准書を握つたら、一行の誰たるを問はず、如何なる危険を冒してでも横浜丸まで持退くことを昼間より打合せありて、万一大使の身上に危険が及んでも批准書を懷ろにする人は他を顧みる勿れ

と伊東子から言ひ渡された。

大使の一行は幸に何事もなく使命を果たして帰朝することが出来たが、千古の遺憾はかの三国干渉の結果たる遼東半島の還附で、丁度伊東子が入洛復命すると同時に詔勅が下つたのであつた。その時臥薪嘗胆十年といふことが同人の間に語り交はされたが、果して其の十年の後に於て国運を賭した日露の対戦が起つた。而して戦勝の結果として遼東半島の要地が我が勢力圏に入つたのは因縁の浅からぬ所であらう。

(24) 記者時代から外遊

1896（明治29）年9月、第二次伊藤内閣が終わりを迎え、書記官長を務めていた伊東も下野した。この機会に頼三は、かねてから関係のあつた、伊東が経営する日報社（東京日日新聞）に入社した。1898（明治31）年1月、第三次伊藤内閣が成立すると、農商務大臣となった伊東の下で秘書官を務めた。4月に伊東が職を辞すとこれに従い、日報社へ復帰した。1900（明治33）年、パリ万国博覧会出品物の審査官を務めたことが機縁となり、念願の欧米外遊を果たした。

伊藤公は戦後の経営を全うするには大政党の援助に依らねはならぬことを思ひ、板垣〔退助〕伯の率ゆる自由党と接近した因縁から、二十九年の秋公は内閣一部の改造を行はんとし、所謂伊皿子会議（当時伊皿子に居住した）を催したが、政党の頭目を内閣に引き入れることを喜ばない人は閣の内外に少なくなかつたので、公は不統一を理由として直に辞表を上つて内閣を投げ出された。伊東子も同時に官界を去ることになつたので、私も共々志望通り東京日日新聞に入社した。朝比奈知泉氏主幹の下に私は理事、編輯部長となり、事務部長の越山太刀三郎氏と興に聊かこれに努力したのであつた。

然る所、その翌々年（即ち明治三十一年）の一月伊藤公が復ひ出て内閣を組織することになつて、伊東子も農商務大臣に任せられ、私は子の秘書官に擢用せられたが、又もや政党関係に付て子独り意見を異にした結果、公は慰留に

力められたが子は却て名代腹と称して僅々数月にして冠を掛けた。私も同時に官界を去て旧との東京日日新聞に復帰したのである。

三十三年の春、仏都巴里に万国博覧会が催されるので、絵画彫刻などの美術品を出すことはいふまでもない所、従来 of 如く専門家のみの鑑査では兎角不平が起り易いから、寧ろ素人の目も加へたら偏頗の非難がなからうといふ、商人出の事務館長林忠正氏の意見が行はれた結果、各新聞社から常に美術批評を書く人々を鑑査官に挙げることになった。時事の寺山〔啓介〕、毎日の吉岡〔育〕、朝報の松居〔真玄〕、中央の大岡〔力〕人民の茅原〔廉太郎〕、読売の関〔巖二郎〕などの諸氏が出て、私も東京日日から出ることになり、毎日上野に通ひ美術学校の教授連と会合して素人評を試みたのは三十二年の夏の⁽³⁶⁾ことである。

私は久しく外遊の志を抱いて居たが年老いた母も居られるので、意のままにもならなんだが、幸ひ巴里の博覧会と縁故が出来、母からも快き許諾を得たので、囑託の肩書きと、少額の打切り旅費を貰つたのを土産として、三十三年三月一日横浜から仏国エム、エム会社のシドニー号に乗つて漫遊の首途に上つた。

乗船のシドニー号は上海でラオス号に代つた。今日から見れば粗末なものであらうが、当時にあつては古いシドニーから新しい、而かも大きいラオスに移つたのは誰も遷替の喜びで、それから先きの航海は一層愉快を覚えた。途中香港、新嘉坡、西貢、ジプチー、古倫母に寄港し蘇士運河、地中海を過ぎて馬耳塞へ着くまでは別に記するほどのこともないが、日々新聞へは往く先々から通信を怠らなかつた。

馬耳塞へ着いた日は日曜であつたが、特に博物館を見せてもらひ、即夜巴里行の急行車に乗つて翌朝目指す仏都に安着した。旅館といへは大壮だがラファエツト街のホテル、サントラル即ち前の諏訪ホテルで、下宿屋並みの家に行客を解いたのである。同船の小川（琢治）理博、白澤（保美）林博、田中（苗太郎）医博、浅沼藤吉等の諸氏も暫く此の家の客となつた。

(36) この文の校註には、隅元謙次郎『近代日本美術の研究』大蔵省印刷局（1964）340頁注（11）を使用した。

私は毎日ルードラボムの事務局と会場との間を奔走したが、少閑ある時はルーブル美術館を始め凡そ案内記に載つてある名所故跡は一箇所でも多く見ることに努めた。又夜分事務局の用や宴会のない時はグラン、オペラ、サラベルナー、オデロン、シヤトレーの各座を覗き歩いた。但し通弁同道。

私の巴里に着いたのは四月中旬、囑託の用向は六月下旬に大体目鼻が付いたので、浅沼、井原（斗作）大橋（乙羽）などの諸氏と共に大陸の小旅行を試みることにになり、先つ白耳義、和蘭、独逸、瑞西の順路を歩き廻り、フランクフルトからは単身となつて里昂を経て巴里へ舞ひ戻つた。瑞西のシヨードフォンでは服部〔金太郎〕氏の紹介に依て時計製造工場や学校を視ることを得た上、歓待を受けた。

私が伯林に滞留して居る時、北清義和団の騒ぎが愈々大きくなり、駐支独逸公使〔クレメンス・フォン・ケテラー（Clemens Freiherr von Ketteler）〕や杉山〔彬〕書記生の街頭で殺されたことを承知したので、到底暢気に外国見物もして居られぬと思ひ、予定の日取りを縮めて巴里へ帰て見ると想像以上に大事になる形勢なので、私は事務局関係の残務を纏めて、兼て同道の約ある浅沼氏を促して倫敦へ向つた。倫敦でも北京籠城の噂取り取りで、手近の南阿戦争の方が閑却せられて居たかの感があつた。私は〔駐英公使館〕小池張造氏の世話で〔庶民院議員〕エドワード、グレー〔(Edward Grey)〕氏の紹介を貰ひ下院に傍聴に出懸けた所、此の日は駐清英公使のマクドナルド〔(Claude Maxwell MacDonald)〕氏から發した電報が籠城以来初めて着いたといふので、其の全文が朗読せられ、議場は一段と緊張したやう見受けた。

私は巴里でも伯林でも特に注意して右新聞社を見たが、倫敦でも同様、タイムス、デーリーテレグラフ其の他の大新聞社を訪問した。夜分暇ある時は度々アーヴキング、テレーの一座を覗きに往つた。丁度一座は米国から帰つて来ての久々興行であつた為め、人気は非常なものであつた。志かし私には此の名優も最早末長く舞台に立つことの叶はぬ人のやうに感せられた。倫敦の滞留は僅か一週間であつたがバザカーの案内記に見ゆる重なる箇所は略々見ることが出来た。

倫敦出發の前、黒井（悌次郎）海軍大将の紹介で秋山（真之）中將（其の時大尉）に面会して米国經由、横浜まで同道することになり、それと巴里から同伴の浅沼氏、後とから追つけて来た石角喜三郎氏（京都の扇子商）を加へた四人連れで、倫敦を出立し、リバープールから紐育へ向つた。私共は夙くクツク社とホワイト、スター線のゲーリック号を約束して置いたのであるが、何分にも南阿戦争の最中であつたから善い船は悉く御用船に借り上げられて居た。約束を楯に取つて懸合つて見ても何時まで待つて乗れるか分らん所から、止むを得ず同じ運賃を払ひながらキューナード線のセルビヤ号といふ古い荷物船に乗ることになつたのである。

さればこそ五日半で大西洋の横断が出来る時代に約、二週間を費やしたのである。併し感心なことには船長が日曜のサービスまで勤め、船員の誰れ彼れも確かな人物らしく見受けた。私は往路印度洋を舞踊やカルタで時の多分を費して居たエムエム会社の船員と比較して頼もしい気がした。船中では秋山氏一流の甲州軍學を聴くのが面白く、中には日露戦争の時、同氏が参謀として日本海に殊勲を樹てられた戦術に思ひ当る節もあつた。

私共が紐育に着いたのは盛暑の堪へ難い時であつたので、私は領事館や大新聞社を訪ふ外、重もな箇所を一見しただけで止め、夜分マンハッタンビーチに涼を納るるのが何よりの保養であつた。そこで持参の華盛頓ボストン行き等の乗車切符は無駄にして市俄古に向ひ、バファロー附近を見物したのみで、浅沼、石角両氏にはナイアガラホテルで休息して貰ひ（秋山氏は後れて紐育を立ちバンクーバーに落ち逢ふ約束）私は其の時間を利用してミス、カートメルを加奈太ハミルトンの閑居に訪問した。秋山氏とは約の如くバンクーバーに会し、同行四人、エムプレス、オブ、インディア号に便して無事横浜へ帰着したのが八月十三日と覚える。伊藤公の立憲政友会は私の帰朝程なく創立せられたのである。

序にいふ、私は巴里以来、博覽会に縁故が生じたやうで、翌三十四年には三十六年に大坂で開催せらる第五回内国勸業博覽の評議員となつた。梅雨の頃、多少の風邪氣を押して毎日のやうに農商務省の會議室に出勤した為めか、遂に軽い肋膜炎に罹た。凡そ一箇月引籠つて療養を加へ全快の後、避暑旁々逗子

の服部氏別荘の一棟を借用して更に静養した。但し時は第一次桂〔太郎〕内閣の出来たばかりなので、私は病体の身を度々葉山訪問に労したのである。

(25) 記者から実業界へ

1904（明治37）年、日露戦争が勃発した。頼三は戦報を得るために、兄玉源太郎台湾総督兼参謀本部次長のもとに日参した。9月、伊東巳代治に代わり加藤高明元外相が日報社を経営することになり、頼三は退職した。翌年春より、山本達雄元日銀総裁の勧めで信濃銀行東京支店の支配人を務めることになったが、1906（明治39）年、桂太郎元首相と伊東の勧めで、新たに創設される南満鉄道株式会社に入社した。満鉄では秘書役長、東京支社主事といった要職を務め、1917（大正6）年には理事に上った。この間、後藤新平や桂の外遊に同行し、1909（明治42）年に伊藤博文が安重根に暗殺された現場にも遭遇した。

明治三十七年の春、日露両国の間に戦端が開かれた。国民は遼東還附の事あつて以来、臥薪嘗胆の意気込みで十年を経過した暁であつたから、実に非常の勇氣と決心とを以て此の大戦に臨んだのであつた。伊藤内閣の時の日清戦争、此の桂内閣の時の日露戦争、共に内閣の寿命を長らしめたに考へても所謂挙国一致の力の偉大なことが証されるであらう。

私は壮年記者の魁となつて戦報を得るために日夜奔走した。さうして兄玉〔源太郎〕参謀次長の部屋、即ち敗朽に傾いた昔し雇独逸人メツケル〔(Klemens Wilhelm Jacob Meckel)〕の居た官舎に半、詰め切りの姿であつた。閑屋（貞三郎）〔台湾総督〕秘書官や小澤（徳平）〔台湾総督府〕副官も将軍と共に此の敗屋に多く起臥せられて居た。

世間は全く戦争気分満ち、新聞は毎日の号外の遅速に因つて価値を論せられる程であつた。偕、東京日日の発行高が著しく増加した九月の末、或る事情から新聞は伊東子の手を離れて〔元外相〕加藤高明子が引受けて経営せられることになつたので、私は朝比奈、越山二氏と共に退社を希望したが、越山氏と

私とは当分残らねはならぬことになり、私は最後の十二月末まで勤め、仕事を後任に引継いで退社するを得たのである。其の前加藤子は態々上六の茅屋を叩いて留残を勧められたが、私は幹部一新の却て自他に利なるを思ひ、社員中から高木信威氏を薦めて自分は固辞したのであつた。

翌、三十八年の春、悠々自適で日を暮して居ると、三月の中旬〔元日本銀行総裁〕山本〔達雄〕男（今の農相）から信濃銀行の頭取小坂善之助氏（即ち順造氏の父）に紹介せられ数次会見の結果、時機を見て幹部に入る内約の下に東京支店の支配人を引受けることになった。然る所、私がまだ行内の様子も分らぬ五月上旬、同行生抜きで、重役の信任厚かつた副支配人の某が為した多年に互る費消事件が暴露し、同時に中心の小坂頭取は忽然病に臥される始末で、飛入りの私の当惑は云はん方がなかつたが、幸に日銀幹部の厚意や山本男の同情に由つて銀行の方は夫々善後の道が付き、私もこれを段落として辞退することにした。

折柄、南満鉄道が創立せられることになったので、〔元首相〕桂公と伊東子とが薦めて呉れ、私は総裁たるべき〔台湾総督府民政長官〕後藤新平男と度々面談を遂げた末、秘書役長として創立の際から同社に入ることになった。⁽³⁷⁾ 翌、四十年の初夏、後藤総裁は渡満して沿線を視察せられ次いで北京を訪問せられるので、私も一行に加つた。私は満洲は初めてであるが、北京訪問は十八年の初遊から実に二十三年を隔てた二回目であつた。殊に大和倶楽員の千名に近いことを始め京津間に於ける邦人の発展に驚かされ、又支那側の新しい文化振りにも滄桑の感を深うした。総裁は頤和園で〔光緒〕帝及び西太后に拝謁し、要路の大官連の招宴に臨み、又此の方よりも答礼を済ませたる後ち天津に下り、此

(37) 御厨貴編『正伝・後藤新平 別巻 後藤新平大全』藤原書店（2007）200頁（「龍居頼三」の項）は、頼三を「台湾時代の後藤の秘書。総督府文書課長」とする。頼三も後藤の台湾時代の功績を語っているが（鶴見祐輔編（一海知義校訂）『決定版』正伝・後藤新平3 台湾時代 1898～1906年』藤原書店、2005、155-156頁）、「回顧録」の記述を見る限り頼三が台湾に渡った様子はなく、國史館臺灣文獻館所蔵『臺灣總督府檔案』にも頼三に関する記録は残っていない。

の処でも同様時の〔直隸〕総督袁世凱と数次応酬せられた。当時の袁はまだ元気に満ちて居たが、後ち袁が失脚して河南に隠退せんとする前、私が佐藤將軍（安之助、其の頃中佐？）と北京市外の海甸に彼を訪ふた時は眞の病氣でもあつたらうが、同じ人とは思はれぬ程の衰弱さを見受けた。私は彼が革命後、遂に帝冠をも戴かんとする得意の頂上に至るまで再会する折りのなかつたのは残念であつた。

四十一年第二次桂内閣の成立した時、後藤男は通相の椅子に就かれたので、会社の方は中村（是公）副総裁が総裁に、首席理事の國澤（新兵衛）氏が副総裁に陞任することになり、私は東京詰の清野（長太郎）理事と共に依然支社に居つた所、桂内閣の後を継いだ山本〔樞兵衛〕内閣の時、中村氏以下の幹部員総辞職し、代つて野村龍太郎氏が総裁、伊藤大八氏が副総裁になつて理事の顔触れも一新したが、其の後幾程もなく大隈〔重信〕内閣が出来たので、野村、伊藤両氏は罷められ、中村男（雄次郎）が総裁、國澤氏が再び入つて副総裁といふことに落ち着いた。清野氏去て以来支社に常勤理事がないので臆て私が主事の名称で支社の事務を執ることになつた。さうして秘書役長の職は私一代で亡くなつたのである。

大正六年二月、寺内〔正毅〕内閣の時、私は挙げられて理事となり、相変らず東京支社詰であつた。同年法令の改まつた結果、正副総裁は変せられ、中村男は関東都督に任せられて会社の事務を統裁することになり、國澤氏は新制度の理事長として会社を代表することになつた。これは世間でいふ三頭政治の弊を済はん為の改正であつたが、実際の運用は予期の如く巧く行き兼たやうであつた。最近の原〔敬〕内閣が成立した時、関東都督に代へるに文官の長官を以てすることになり、会社の方は社長、副社長といふ名称で野村龍太郎、中西清一両氏が主宰することになつたが、同年両氏が辞職したので、早川千吉郎氏が新に社長となり、松本烝治氏が理事から副社長に陞されたのである。

私が今春満期退職の時まで在社十五年の間に、強い記憶に残つて居るものは、四十二年十月の哈爾濱に於ける〔韓国統監〕伊藤公の遭難こそ其の最なるものである。公は一日私を靈南坂の邸に招かれ、近く満洲一遊の積りなれば諸

事頼むとの話があつたので、私は早速中村総裁の許に大体のプログラムを通して置いて公に随行することになり、一日後れて東京を発して公と大磯の駅頭に会し共々一行に加つて西下したのである。神戸からは大坂商船の鉄嶺丸（後年大連から復航の時朝鮮沖にて沈没）に乗り込み、公は至極の元気で随行の人々や、船長事務長などを相手に夜の十二時頃までも、維新前後の実歴談、殊に横浜から英船に密乗して英国に赴いた時の困難話などせられ、退屈の時は横山〔⁽³⁸⁾正男〕事務長（今は満鉄ホテルの監督？）の尺八を所望して旅情を慰められたのである。

大連では官民合同の大歓迎会が催され、公は非常の満足を以て食卓に大演説を試みられた。さうして帰途大連で天長節の夜自ら主人となつて大祝賀会を催さうと約され、其の準備を満鉄幹部の人々に依頼せられたのであつた。公は着連の翌日先づ旅順に赴いて白玉山に参拝せられ、それから各所の戦跡を弔はれた。支那側でも歓待に努めて公が奉天滞留の日、特に宮殿の宝庫を開いて縦覧に便した。公は奉天から撫順炭坑に往復せられ、其の翌、即ち二十五日の朝北、長春に向はれたのである。

奉天を出て長春近くになるまでの間、車窓から遠近を望み、地図を展へて同車の案内役たる人々から当地の戦況を聞かれた。公の絶筆たる左の一首は実に此の間に成れるものである。

万里平原南満洲 風光濶遠一天秋

当年戦迹留余憤 更使行人牽暗愁

公は感慨無量の体で、やがて常用の墨壺を引き寄せ、有り合ひの奉書？半切に口吟を写され、未完稿ぞといひながら我々に示された。此の絶筆は古谷（久綱）秘書が暫時預つて居たが、後ち井上馨侯へ贈ることになつた。

公が長春に着かれた其の夜、顔道台の招宴があつて、十一時過、宴席から直に停車場に向ひ、露国側からの出迎での貴賓車に移られ、哈尔賓へ到着したのが、翌二十六日の朝九時過少々前であつた。其の時公は待受けの露国蔵相コー

(38) 古谷久綱『藤公余影』民友社（1910）281頁。

ツオフ〔(Vladimir Nikolayevich Kokovtsov)〕氏を車内に延き、川上総領事（後満鉄理事、俊彦氏）の通訳で、二十分間余り他人を交へずに会談せられた。それから公は下車して出口より右方に集まつて居た各国領事等と握手し、身を転して出口に向ひ徐歩せられつつある時、右側（左側は線路）の人影より鮮人の安重根が立ち現はれ、ブローニングの拳銃で狙撃した。公とコートツオフ氏の間に起て歩きながら通訳して居た川上氏も、同時に右肩を撃れたのである。公より数尺の後に在つた中村是公、室田義文の両氏は飛びかかつて倒れんとする公を助けて、まだホームに着いて居た列車内に扶け入れ、随員の小山（善）医師に一診せしめた時は最早絶望と宣告せられ、応急の手当も何の甲斐なく、偉人の魂は空しく他界に去つたのである。森（泰二郎）秘書は公が下車せられた後、車内の手荷物を片付け最後に下車する時、左背面に流弾を受けたが、丸は脂肪を貫通しただけで至て軽傷、私は公等より数歩後ろに田中（清次郎）満鉄理事と相並んで出口の方へ歩を移しつつあつたが、私の位置が銃口に面して居たに拘はらず無事で、比較的安全の位置にあつた田中氏が右足の踝に貫通傷を負ふた。

公の遺骸は其のまま大連に奉し帰り、露西亞町なる最初の小さいヤマトホテルの広間に於て、〔満鉄大連医院長⁽³⁹⁾〕河西〔健次〕、〔満鉄大連医院外科医長⁽⁴⁰⁾〕尾見〔薫〕両博士其の他が防腐一切の手当を施した上、最も鄭重に納棺せられたのである。斯て遺骸を載せる為に特に回航した軍船秋津洲に安置して横須賀に帰着し、即日霊南坂の官邸に移して後、国葬の盛儀を以て大井町の谷垂に埋葬せられた次第は世間知る所の如くである。

次に明治四十五年の夏、当時閑散の身であつた〔元首相〕桂公、〔元通相〕後藤男、〔元大蔵次官〕若槻禮次郎氏などが歐洲漫遊を思ひ立ち先づ露国を訪問せられることになり、私にも同行を勧められたので、早速会社の請暇手続を済ませて一行に加はり、共に神戸から乗船大連に向ふことになつた。公等の此の外遊を支那側では余程重大視したものらしく、一行が大連に着く日取りを見計

(39) 満史会編『満洲開発四十年史 補卷』謙光社（1965）150頁。

(40) 留岡幸助「尾見博士の死生観」人道（263）（1927）7頁。

ひ、今の大統領の〔元内閣協理大臣〕徐世昌が通訳として〔総督府財政顧問〕陸宗輿を伴ひ、北京から態々大連へやつて来た。それは自分が東省総督時代の旧識である後藤男に便つて桂公と会談せん為めであつた。桂公も此の機会に於て徐と相見んことを欲し、北行の列車内で面談せられたが、支那側の目的は単に探りにあつたらしくも承知する。徐、陸は奉天で別れて北京へ帰つた。

露国側では伊藤公の時と同様、特別車を寛城子に廻して歓待した。途中何の奇もなかつたが、白樺の林の目の及ふ限り生え茂つて居ることや、名も知らぬ五彩の野草の時得顔に咲き乱れて居る夏の西伯利亞は、初遊の私に取つては殊に興味深く、與安嶺や貝加爾湖の雄大な景致も気に入つた。私は西伯利亞道中は恐くは加奈太原野よりも眺めのないものであらう位に想像して居たので、一段と面白い感したのである。但し車窓を開けは熱塵が舞ひ込み、鎖して置けは釜中にある苦みだけは聊か閉口した。

一行が露都に安着したのは七月二十一日、途中出迎ひの桂公の女婿たるへき伊藤文吉男からも内々耳にした先帝の御悩は、我々の入露後、東京からの電報は一喜一憂であつて、桂公、後藤男等も元氣銷沈、前進の予定も立て兼ねた末が、大体に於て御病勢の重らせ玉ふ御様子なので、公等は直に帰朝せられることに極つた。そこで本野（一郎子）大使が斡旋して桂公、藤男とコーツオフ首相との会見が数度行はれた。其の場所はエラーギンの閑散な一室で他人を交へず大使自ら通訳の労を取られた。一行中別れて英独等に遊はんとする連中と露都で袂を分つて公以下私等は二十八日夜露都を發し、莫斯科を経て（総領事は川上氏）帰路を急ぎ、三十日午後スキズランに停車場に来た時、崩御の飛電に接し一同恐懼、暗然の裏に朝鮮を素通りして帰朝したのである。

又単なる社務としては私は大正六年の夏、吉長鉄道借款改定契約調印の爲め北京に二箇月寄留した。同行の人は其の前川上理事と共に北京に十一箇月を費して未調印のまま引揚げ後、〔後藤〕鉄道院総裁の秘書となつた岩永裕吉（会社の囑託として）であつた。支那側より林（権助男）公使を通して右契約の調印と同時に、細則の議定を申込んで来た所、当時前年来担当の川上氏が公務で北滿西伯利亞旅行中であつた爲め、私が代つて北京に派遣せられたのである。本

契約は前年一応議了せられたもので、残りは二、三文字の修正位に過ぎぬ筈であるのに、支那側の委員権量、陸夢熊等が交通総長の曹汝霖や次長の葉恭綽の意を迎へて動もすれば巧に難題を持出して既定の根本義にまで触れやうと試みるので、案外時日がかかった。志かし公使始め館員の援助に依つて総て滞りなく片付いたので、私は帰途〔関東〕都督府と本社への復命を済ませ、十一月の初めに帰京した。

交通部との会議は何と急き立てても、一週に二回より多くすることは出来ず、それは支那側の委員は日本語でやつた会議の顛末を其の都度漢訳して総、次長に見せ、時には国防部にも持出して訓令を請ふが故であつた。私は会議の終るが否や先つ本社の其の模様を電報し、続いて会議筆記を郵送するだけで、其の他は随時本社の指揮通り動作するのに過ぎぬから、平生は寧ろ閑散に困つた位である。さればとて引切りなく東京からも大連からも電報が来て即時応答せねはならぬので、支那側から接待振りの勤めもあつたが泊り懸けの見物は一切差控へた。そこで其の間を利用して聊か支那劇でも研究して見ようと思ひ、〔北京公所〕牛島吉郎氏や新井善七氏と共に年君といふ支那語の先生に就いて戯考と題する脚本集を読み習ひ、用事に差支のない限り、夕食前の約、一時間は梅蘭芳を見る為に吉祥園へ出懸けるのが日課のやうになつて居た。私は舞台における彼を見る丈けであつたが、其の翌年松之助が遊歴した時から本人同士の間には私交が始つたのである。八年の春、梅の東遊は畢竟兩人の雑談から実現した芸術の親善ともいへはいはれるやうな次第である。

(26) 家事について

頼三と愛子は、5男3女に恵まれた。頼三の母と愛子の継母は、ともに1913（大正2）年に亡くなった。

(41) 久留只一『大正第七年版 銀行会社職員録』日本興業通信社（1918）会社之部（ミ）之部24頁。

小浜、栗子の兩人が静岡時代に生れたことは前にもいふ通りであつて、松之助と豊とは築地の宅、喜久三、寿恵子⁽⁴³⁾は枢密代官舎内、昌吉⁽⁴⁴⁾は首相官舎内（此の両官舎内の建物は取払はれて今はなし）五郎⁽⁴⁵⁾は上六、四十七番地の茅屋に生れたのである。全家中亡き母と五郎とを除く外は一度はメソヂスト教会の牧師から洗礼を受けたが、私等が地の教会に満足し兼ねるやうになつた時代は、児等も追々成長して教会行きを好まぬので、私等も宗教は各人の掬ふ所に任せ、干渉を慎むことにした。

母は大正二年の春、米寿の祝ひした其の秋九月、病を以て長い生涯を終られた故、遺言に依て青山善光寺の墓地に葬つた。法号は鶴操院心鏡永寿大姉といふ。又奥田の母も此の年五月七十六歳を以て病死せられたので、遺骨は大坂下寺町萬福寺、即ち奥田家の墓地に合葬して貰ふた。奥田の父の法名は淳誉良然信士、母の法名は善照誠園信女である。

此の稿は私が大正六年の秋、北京二箇月の寄留中の余暇に書き始めたのであるが、何分にも象のやうな記憶を辿つて行くので、随て年月や人名などにも間違ひの少くないのに気付き、その後度々補正したのである。一体私は他人からは筆まめといはれ、或る点までは承認もするが、自身に付ての記録は昔から試みやうともせず、日記すら満足に書けた例しのない無精者である。それで私も老健を誇つて居たが、今初夏の大患から俄に怯気付きいつ何時言ふたり、書いたりすることの叶はぬやうになるかも知れぬ故、せめて家系や自身の生立ちは児等にも承知してもらひたいと考へて、ほんの過去の六十幾年の荒増しを書き

(42) 1887（明治20）年1月生まれ（内尾編・前掲注（20）た169頁）。東京高等商業学校卒業（『東京商科大学卒業生名簿（昭和16年5月末日現在）』東京商科大学、1941、23頁）。服部金次郎の三女を妻とする。

(43) 1892（明治25）年4月生まれ（内尾編・同上）。

(44) 1895（明治27）年2月生まれ（同上）。1914年（大正3）、東京美術学校予備科日本画科入学（『官報』1914年4月7日付）。

(45) 1902（明治35）年9月生まれ（内尾編・同上）。東京帝国大学薬学部卒業（『ダイヤモンド会社職員録（全上場会社版）'69』ダイヤモンド社、1968、468頁）。

列ねたに過ぎぬ。但し私の死後、仮令この稿の一節でも印刷などして親類や知人に頒つといふやうなことは堅く断つて置く。 大正十年秋日改写筆

3. 龍居頼三「母のおもかけ」(抄)

(1) 愛子との出会い

(前略) 私は十三歳の暮に、高麗橋の島田組へ奉公にやられ、長ずるに従ひ中国、四国の支店廻りをしてゐたが、其後漸く兼てからの志望が叶つて、東京の本店(元は京都に本店があつた)に転任することになった。処が不幸にして、島田組はあまりに手を揚げ過ぎた為め、反つて難境に陥り、やがて幾何もなく、本支店とも全部閉店するの已むなきに至つたのであつた。

島田組がこの拡張の途次、四方に人材を求めた結果、入店した連中は、この閉店と同時に忽ち退去、四散してしまつたが、私共のやうな、所謂子飼の者等は、全く昔の主従関係で育つて来たのであるから、他の人々のやうに、直ぐさま「左様なら」といふ訳には行かぬのだ。そこで若干の子飼達だけが、上役の指名で踏み止まつて、残務片付に取りかかることになつた。

私はこの時、残務係から云ひつかつて、急に大坂へ飛脚旅行をすることになつたのを機会に、奥田家へ再嫁したおとめ叔母さんを訪ねたが、勿論此の時が奥田父子と挨拶をかはした最初であつたのである。

時に愛子は十六才、私は十九才であつた。其時奥田の父から滞阪の日取りを聞かれたので私は、

「実は明日神戸発の船で引返すことになつてゐます。」

と答へると

「それならば、せめて一泊して行つたらどうか」

と言はれたが、時恰も盛夏であつたので、店の人々とも夕涼から種々いろいろな調べものをするに打合せがしてあつた為め

「御厚意は有りがたいが」

とお断りしたのであつた。

ところが、予定の帰店時刻までには、相当空が出来てしまったのでそこで私は

「久しぶりに御霊ごりやうさんの俄にわかを見に行きたい」と云ひ出したら、叔母も愛子も立どころに賛成して、

「それじゃあ、三人で行かう」

といふことになり、急に連れ出つて出掛けたのであつた。

(中略)

こんな事で半日を暮らし、夕刻店へ帰つたが、翌日は奥田の家には暇乞ひもそこそこに、神戸から出帆したのであつた。当時私が愛子に対する気持ちは名の如く愛らしい、色は黒いが髷あぐほのある、「大阪の町娘」といふ以外、別に何の感興もなかつたのであるが、兎も角當時が愛子との初対面であつた。併し帰京の後も今日のやうに絵はがき一枚飛ばすでもなかつた。

(2) 愛子との再会

次で翌年一月整理関係の上役に随ついて下阪し、この時は大分永く奥田の家に泊めて貰つた。其時愛子の継母であるおとめ叔母さんの話に依れば、恒七さんの考へでは豊後の弟即ち及川すぎ子の父、喜助さんの所から愛子に婿を迎へ、従兄いとこ妹夫婦で奥田の家を継がせたい心であつたので、甥の虎七をそれとなく大阪へ呼びよせ、暫く心易い大店で見習ひをさせてから、他日愛子の婿にするつもりであつたそうだ。

ところが此の争を小耳にはさんだ愛子は誰に教はつたのであらうか、

「血筋同志の結婚は、子孫の代になつて、□□か□□の出ることが珍らしくない、若し豊後から家の相続人うちが来るといふのなら、其人には適當の嫁を他から迎へ、自分は全く他人の処かたづへ嫁けて貰ひたい」

といふことを、子供心にも堅く決心して居た。恒七さんとしては、従兄妹同志の夫婦といふことは世間に例のないことでもなしといふので、其事を望んで居たのであつたが、愛子の決心が意外に強く、又恒七さん自身もそのことを段々了解された結果、喜助さんとの間で、

「それは縁のないものであろう」

といふことに諦めて、この話を打ち切り、虎七さんを郷里豊後へ帰へしてしまつたのであつた。

(中略)

こんな話のあつた後^{あと}へ、不意に飛び込んだのが即ち私といふ人間であつた。二人とも大阪生れではあり、芝居趣味なども多分に共通するところがあり、自然「東京の兄さん」と云つて、万事頼りにする様子も見えるし、且つ又私は母一人子一人で、兄弟姉妹の味を知らぬ淋しさへ、急に妹が出来たやうな喜びに打ち解け合ふのであつた。

処が私の立場として愛子を觀察するに、三味線など相当に弾けるらしいが、学校といふものをまるッきり知らない。そこで私は恒七さんに、

「これから先の者は、たとひ商人でも又商人の女房でも、全くの学校知らずでは困りはしませんか」

と云ふと、恒七さんは

「併し十七才にもなるものを、今更学校へもやれまいじゃないか、夜分^{やぶん}でも少し教へてやつて呉れんか」

と云はれるので、私は当時慶応義塾で出版した「学問のすすめ」といふ冊子と、及び小学読本巻の一とを買つて来て、毎晩読み習はせた。すると恒七さんから「序でに十呂盤も」といふ注文が出たので、之れも出来るだけ教へた結果、大分^{みちあ}道開きが出来たのであつた。

その内に私共の大阪出張の用向きも片付いたので、東京へ帰ることになつた。併し此の場合、折角教へかかり、学びかかつた愛子の勉学をそれぎり捨ててしまうのは、いかにも残念に思つたので、私の帰京後私の代りに、愛子の安直な家庭教師を引継いでくれる人を物色した結果、豊後の渡辺といふ医者 of 倅で、大阪へ修業に来て居た人^{づきあひ}を頼むことにした。此の人の父の渡辺^{だいい}医師は、豊後の奥田の家とは親類交際をしてゐた人である。恒七さんは豊後の人故大の福沢翁崇拜で、「学問のすすめ」を見て

「成る程いい本が出来て居るなァ」

と、頻りに喜ばれたものだ。

(3) 愛子との縁組

明くれば九年の春、又々数人で大阪へ行き、用件に数ヶ月を要したが、漸く残務片付けも済んだので、主人からは一枚の謝状を貰つたのみで終りを告げたのであつた。

茲に於て、私は先づ以て自分の前途から考へねばならぬ立場となり、而も同時に奥田の家の縁談問談が起つて來たのだ。

奥田の父、恒七さんも今では、婿を豊後からといふ希望を断念しなければならぬ事となつたので、私と愛子との心持ちが合致するやうならば、自分には異論はない。その代り二人の間に出来た子の中、一人を奥田の相続者にして貰ひたいといふ呑氣な註文であつた。

ここで始めて、双方の親の間に真面目な話が起つたのであつた。この時私は愛子に、

「若し私が大阪に止まることにして、三十四銀行の岡橋〔治助〕頭取に頼めば、必ず端^{はし}た月給位は呉れるであらうが、私はそれを好まない。少し向ふ見ずかも知れぬが、私はどうしても東京に出て、自分の行く道を求めたいと思ふ。そうなれば自然相当深刻な貧乏生活も覚悟してかからねばならぬ。単に東京が見たい位で随^ついて來るならば、あんたとしても余程考へものではあるまいか」と云つた。事実その頃は既に東京が流行の源で、一も東京、二も東京だ。髪の毛なども総べて東京風になり、大阪の娘が東京に行きたいといふことは、丁度男が洋行を望んだ程の熱度であつた。愛子は

「何でも、かでも連れて行つて貰ひたい。自分は二子織の着物と、銘仙の羽織でもあれば、それ以上の希望を夢みて居るものではない」

と云ふ。そこで私は

「それ程の覚悟なら同行しよう」

と頓に決心がついて、其趣きを親に答へ、僅かに残つてゐた私の持ち物で、金になるやうなものは金に換へ、旅費其他落ち付くまでの用意を調べてから、私

が尾^ついて来た矢野貞興さんに媒介役を頼み、急に形ばかりの三々九度を済ましたのであつた。

黄道吉日は七月の三十一日。矢野さんはやがてお開きを宣しながら、恒七さんと共々、お膳を椽鼻に持ち出させて、ますます上機嫌^{さかづき}の杯を重ねて居た。其間に花嫁さんは浴衣に着換^{たすき}へて襷^{たすき}掛け、翌日の鹿島立ちの支度^{さくど}に忙殺^{まじく}のかたちである。何にせよ、式も披露もゴツチヤにした水入らずの一席で、料理はすべて叔母の庖丁で済まし、総費は精々十円は出まいといふ手軽さ、それでも百年を誓ふ厳肅味には変りがないから面白い。斯くて翌八月一日神戸を出る船で、親子三人上京の途についたのであつた。

(4) 新婚当時の生活

其の頃私が以前から知つてゐる山縣といふ人が、同志三四人と共に、同じ淡路町に広運舎といふ、東京から前橋、高崎二ヶ所への郵便物の請負運送の業を営んで居たが、或る日私に向つて

「閑^{ひま}で困つてゐるのなら、君も少し手伝ひに来ないか」

と云つてくれた。場合が場合ゆゑ二ツ返事で行くことにした。行つて見れば別に六ヶ敷い仕事でもない。唯三日に一度位交代で早出の番が廻つて来るが、其朝愛子は三時半に起きる。何分路地の奥の住居ゆゑ、私が出掛けた後再び愛子は、その木戸の締りをせねばならなかつたのである。処が晦日に私の貰つた手当は金三円五十銭であつたので、私等もこれには大分失望したものだつた。

(5) 静岡時代

翌十年の春、島田組時代の中年者ではあつたが、私より一廻り^{ひと}も年齢^{とし}の上の人で、元は明石の藩士で平井雄介といふ人がある。今の深川清澄公園の中に住んで居た。此の人にチョイチョイ招かれては書きものなどの手伝ひをして上げた。

或る時この平井さんから

「至急相談がある」

とて私を呼びに来たので、早速行つて見ると、其用件は静岡行の話であつた。平井さんの云はるるには

「静岡県庁の為替方は、従来川崎組でやつて居たのだが、相当の引受人あらば、其の業務を譲りたいといふのだ。処が神田区内では多少知られて居る和久井久次郎といふ人がそれを引受けることになり、川崎組の方は高橋宗八氏が黒幕で、自分は和久井氏の依頼で静岡へ行くことになつてゐるが、君も行かぬか。併し僕はそう永くは静岡に居られぬから、後は元来^{くろうと}玄人の君に願ひしたいのだ。但し僕は東京の本店には引続き関係してゆく積りである。君のことを予め和久井氏に相談したら、結構だから話を進めてくれとのことだ。只お断りして置きたいのは君の待遇のことである。最初の故到底充分なことは出来ない、先づ月給は十円、それに静岡には附属した家が二棟ある故、其一棟を無家賃で使つてくれてよろしい。店員は和久井からも行くし、又川崎組に現在勤めて居る人々も引継ぐことになつて居るが、君にそれ等の支配をして貰ひたいのだ」

といふのであつた。

「そんな^{よりあいじょたい}寄合世帯のやうな処に、私如き若輩が行つてうまく行くでせうか」と私が云ふと、平井さんは

「夫れは及ばずながら僕が控へて居るから心配に及ばぬ」

と云はれるので、私は大体承諾して同家を辞し、帰途もいろいろと考へたのであつた。

「今こんな苦しい生活をして居る際だから^{たとひ}仮令田舎行きにもせよ十円の月給にせよ兎も角定収になるのだ。彼れ是れ云つては居られぬ訳だが、翻つて愛子のことを考へて見ると、彼女は^{ぐら}その日暮しのやうな^{みじめ}悲惨な生活状態であつても、自分は東京に住んで居るのだ。といふ誇りと満足とで僅かに其苦勞を慰めてゐるのだから、今更らの都落ちを定めて悲観するであらう」

といふことに考へ及ぶと、タツタ今、平井さんに承諾を与へて来たのが、少々早計であつたかなといふ懸念も湧いて来た。併し兎にも角にも就職の口が^あ開いた、といふことに対しては、必ずや喜んで相談に乗つてくれるだらうなどと思

ひながら、急いで帰宅したのであつた。一部始終を話すと、意外にも喜んで賛成してくれたのは、母よりも寧ろ愛子であつた。

(中略)

(前略) その内に月満ちて長女が生れたが、愛子があまりに、八犬伝の浜路に心酔してゐたので、生れた子に小浜路といふ名をつけようかといふ話も出たのであるが、あんまり諄いといふので「小浜」と命名した。

大体私としては静岡生れ故、「静」位でよくはないかと思つたのだが、愛子は是非「浜」といふ字を入れたいと希望するので、「小浜」と決めたのであつた。

(中略)

(前略) 私としても「学校無し」といふ方では愛子以上の悩みを有つて居た。尤も漢籍の外、英語も多少手ほどきはしてあつたが、私は更に奮発して、露木精一といふ人の処に通ひ、真剣にパーレーの万国史を学び初めた。この人も僅か二、三の弟子を引受けて居た。而も私はこれでは足り^{しか}れとせず、せめて会話だけでも是非上達したいと思ひ、インブリーとかプリンクリーの会話篇を始め何々文法書とかいふ書を丸善あたりから取寄せて、^{こつこつ}屹々と勉強した。と、この事を知つた店の若い人々が、我々も是非やりたいといふので、後には露木さんに報酬を定めて夜分店へ来て貰ふことにした。(以下略)

(中略)

私の英語熱は更に燃え立つて、露木さんの処に通ふ傍ら、県の中学校の英語教師フエツゼラルドといふ人にも教へを乞ふところ、

「一人ざりといふのも少々工合が寒いから、せめて二三人仲間を作つて貰ひたい」

といふ先生の希望であつた。そこで相談の結果、仲間を作つたが、後の理学博士織田顕次郎氏なども其中の一人で、一週に二三回づつ共に通つたものだ。この織田氏は当時既に理学士で、中学の教師を奉職して居た。

先生の希望として

「せめて皆で十円位月謝を出してくれ」

との事であつたが、思へば安いものであつた。先生は城内の立ち腐れ同様の西

洋館に住んで居たが、之れは徳川時代にクラークといふ人のために建てたものであるようだ。

私は先づユニオン、リーダーを読まされ、一ヶ月くらいは無事に勉強した。ところが子供こそあつたれど、先生夫妻は共に二十台の若さだから、ややとすると勉強はそツちのけで、カードプレーイングを皆に教へてくれたり、時々私の案内でピクニックもやつたり、又時には私の家にも遊びに来た。西洋人を相手に食事を共にしたのは、愛子は勿論、私としても此時が恐らく始めてあつたらう。

斯く静岡に落付いた我々夫婦は共に独学自習の天恵も受け得るし、気候は良し、毎日富士山の霊容を眺め飽きず、物資も亦廉価、其上、私の月給も追々増して来るし、すべてが大分安定した喜びを味つたのであつたが、それも束の間であつた。といふのが、元来和久井といふ人は神田の旭町で下野屋と称し、小地主であつて、質屋に金融するのが本業であつた。従つて実力がそれ程でなかつたと見え、追々資金の運転に困難の色が見えて来た。其原因は資金の固定であつた。

その為め和久井氏は静岡の営業を誰れかに譲りたいと思つて居る矢先へ、それを引受けたいと云ふ人が現はれた。それは岡山の池田家をバックとして居る士族の建てた国立銀行の取締役で宮明信吾といふ人であつた。

その時分、平井氏は裏面衝に当つたが、実は既に和久井組から手を引いて居たので、私は静岡の店を次席の人に頼んで上京し、双方の間に立ち交つて、多少の働きをせねばならぬ立場となつたのである。

折角平和に落付いて居たものが、急転直下、不動の身となつた私であつたが、兎も角其の商談は纏まり、県庁の許可を受けるまでに漕ぎ付けたのであつた。

愛子は「静岡も良い所だが、西を見ても、東を見ても山ばかりで、一体何時になつたら西へなり、東へなり出られるのだらうと思ふと、少々厭^{いや}になる」などと時々言つて居ることもあり、又大阪の方としては、我々二人が出たきりで、まだ孫の顔も見せないものだから、「機会^{をり}があつたら一度戻つて来てくれ」といふ恒七翁の望みもあることだし、それにはこのゴタゴタして居る間が、願つて

もない好機だと思つたので、愛子に母と子供とを連れて、暫く大阪へ行つて貰ふことにしたのであつた。

斯く足手纏ひを除き、私は東京で充分腰を入れて努力もしたが、今度の引受人宮明氏は一寸県庁へ顔を出したきりで引さがり、中途同じ銀行の取締役永島良幸といふ人が代つて引受けることに極まつたが、県庁では結局池田家の後ろ楯といふのが目当てで、仔細なく許可することに内定して居たのだ。

斯うして私は一応静岡とお別れすることになつた（以下略）

（中略）

（前略）愛子と小浜を東京に呼び寄せ、再び借家住居といふことになつた。

その家は日本橋北島町の「宇の丸」といふ米屋の路地の中で、曾て川崎、和久井の取引の際、川崎側の代表を務めた高橋宗八といふ人の持ち家であつた。入口こそ路地であつたが、土蔵付きの数寄を凝らした家だ。

さて、私としては別に前途の成算もないのであつたが、と云つて、いつまでも静岡に焦ぎ付いてしまふのも好ましくらず、兎も角も東京に落付いて、何とか方法を決めたいといふ考へであつた。

ところが今度新らしく、和久井から静岡の店を引受けた永島側から改めて私へ

「永いこととは云はぬ。何分素人^{しょうと}ばかりで勝手がわからぬので困つてゐる、君の女房役をする者は私の方から出す故、どうぞ今一度静岡へ行つてくれまいか」

といふ懇望が出たので愛子に話すと、

「東京東京と歸つて来たものの先きが見えてゐるといふ訳でもなし、私としては二度の静岡行きも決していやではない」

といふ。そこで私もこの依頼を引受ければ、種々都合のいい事もあるので行くことに決心して先方に承諾を与へ、北島町を引払つて再び静岡へと出発したのであつた。

（中略）

さて静岡へ着いて見れば、店は和久井組といふ看板が、永島店と塗りかへら

れてあるので、元の古巣の感を深くしたばかりでなく、誰れも彼れも歓迎してくれるので、私共は以前に増して落付いた気分が出たのであつた。十二年夏のことである。

(中略)

ここ暫く平和の状態が続いたかと思ふと、店主の永島が他の仕事に手を出して、大分手許が苦しくなり、そろそろ運転資金を引締め初めた。それは永島を担ぐ悪玉共が、横浜高島町の遊廓を池田家所有の吉田新田（現今の真金町）へ移す計画を立てたのであつた。其論拠は高島町の如き日本の大玄関とも云ふべき処に、あんな見苦しいものの存在して居ることは、大きく云へば国辱であるといふにあるのだ。成る程理由だけを聞くと立派だが、其の実は永島が現在の營業者に安い移転料を与へて、遊廓移転を実行せしめ、従来田圃であつた吉田新田を、一朝にして不夜城の地たらしめ、其の間にタンマリ儲けて、自分の池田家始め高利の借金も償ひたいと云ふのであつて、慾は慾に違ひないが、其の心情は充分酌むことができたのだ。併し其処に到るまでの間に、平沼から高利の金を借りたり、中間の人々に搾られたり、其上に又先方が、女郎屋でもやろうといふ相手であるだけに、夫々策士といふ奴が附いてゐるので、中々当初の計画通りにスラスラと事が運ばず、勢ひ無理に無理を重ねるといふ様な有様であつたために、自然手許が段々と苦しくなつて來たのも亦已むなき次第であつたのだ。

そこで本店支配人の栗津さんから私（静岡店の支配人）のところへ

「何んとかして東京へ来てくれ、私一人の手では、とても、あのジャジャ馬は止め切れない、静岡の方は何とか都合をつけて是非共本店の方へ来てくれ」といふ頼みがあつた。

私も静岡に居ても気が気でなく、且つ斯うなるといつまでも静岡に土着する意思もないので、永島氏にその相談を持ちかけた処、どういふ訳か、同氏は気軽に其話に乗つてくれた。そこで島田組以来の親友で現に次席にある宇野福三氏を後釜として、私は急に東京に帰ることになつたのである。

それより前、二女栗子も静岡で生れたのであるが、其出産の時、私は上京中

であつたため、栗子は一ヶ月近い間、名無しの赤ちやんであつた。静岡へ帰つてから私がいろいろ考へた末命名したのであるが、此の名の由来は今日教科書にも載つてゐる「甲斐のくり子」から出て居るのである。

(6) 浪人時代

斯して十四年の春、くり子が生れてまだ間もない時、再び静岡を引上げ、清水港から静岡丸に乗り込んで横浜着、中橋和泉町の店に程遠からぬ鍛冶橋外の某旅館に落付いた。何しろ当才の赤子を連れてゐるので、急遽家探しに苦心した結果、見付けたのがあの築地の家である。

(中略)

築地住居の内に松之助、豊が生れた。

前にも云つた通り「自分には学校教育がない」といふ愛子の引け目は、築地へ来て以来種々の人と交際するに及んで益々強く感じられたらしく、其結果、娘二人は是非とも相当な学校に入りたいといふので、相次いで小浜と栗子とを麻布の東洋英和女学校の寄宿舎に頼んだ。後に聞けば教会から推薦して貰へば、校費生或は半校費生などの便法もあつたのであるが、愛子は、たとひ家の方はいかほど詰めても、子供には一切苦しいことなど知らせたくないといふ、例の負け嫌ひから頑張り通したのであつた。

(前略)十四年の暮、私は笑つて永島氏と袂を分つやうな成行きになり、十五年の正月からは本当の浪人生活に入つたのであつた。頗る気楽にはなつたけれども、貧乏の方は相変らずであつた。併し此の時こそと思つたのでドクター、イビーの書齋に通ひ、無報酬の手伝ひを自分から買つて出て、先方の用弁にもなれば又己れの英語勉強の一助にもしたのであつた。

(7) 官員時代

十五年の暮、私は先輩友人の尽力で浪人生活を打ち切つて、思ひも寄らぬ参事院に勤める身となつた。

翌十六年の夏、伊藤公の一行が帰朝せられ、其中には洋行前から知合ひであ

つた伊東巳代治さんも、参事院議官補として居られたので、書記生の私は、其後役所の方は「宅調」といふことにして貰つて、其^{じつ}実一番町の巳代治さんの宅へ通勤して、洋行中の書類片付けの手伝をすることになった。

十七年には制度取調局が出来、同じ年朝鮮の騒動あり、十八年には伊藤公の天津談判あり、私も前々からの因縁で其一行に加はつて始めて支那の地を踏んだ。

(中略)

十八年の暮、最初の伊藤内閣が成立し、二十一年には枢密院が生れて、伊藤公は最初の議長となられ、私も永田町の枢密院事務所の長屋に引移ることとなった。併し母や愛子はこの移転には少からず二の足^{てい}の体であつたが、来て見れば意外に気に入つたのみならず、一方築地の家の家賃^{あが}の上りだけ娘達の女学校の費用が多少とも助かるといふ訳になり、其の点愛子も満足のやうであつた。

初め築地の家は月九円ほどで貸して居たのだが、女学校の費用は勿論それだけでは足りなかつた。

此の官舎の長屋で喜久三と寿恵子が生れた。喜久三の生れた時には、頼みつけの木挽町の産婆が帰つた後、俄かに出血の為め愛子は一時気を失つた。之れには家中大狼狽であつたが幸ひ小西主治医の宅が程近く、代診の高戸さんが早速飛んで来てくれたので無事に回復したのであつた。

(8) 東京日日新聞時代

是れより先、私は二十四年松方内閣の時から、巳代治さんの麾下として、東京日々新聞に關係^もを有ち初めて、自分も新聞といふものに大に興味を覚え、今少し深入りして見たいといふ希望を抱いて居たところ、偶々^{たまたま}二十九年の伊皿子会議で、伊藤公の日清戦後の挙国一致内閣の意見が行はれず、内閣は忽ち瓦解したのを機として、私も小役人生活から足を洗ひ、日報社(東京日々新聞)に入ることになったので、久し振りに築地の旧宅へ戻り住んだが、周囲の空気は依然たる築地で、馴染みの人々も多く、愛子は大分お得意であつたらしい。

(9) 農商務大臣秘書官時代

処が三十一年一月又々伊藤公に組閣の大命が降り、巳代治さんが農商務大臣となり、私はその秘書官を任命されたので俄に築地を引払い、麴町富士見町の農相官邸内の秘書官々舎に移った。然るにこの内閣は僅々数ヶ月で倒れ、我々に至るまですべて退官したのであつた。

そこで私は再び日報社に通ふことになつたが、困つたことには子供等の学校関係があり、あまり再々転校もさせられないので、下町住居を断念しなければならなかつた。幸ひ上六番町四十七番地にボロ家を一軒有つて居たので取りあへず其処へ移つた。五郎は三十五年この家で生れたのであつた。

4. 龍居頼三年譜⁽⁴⁶⁾

年	出来事（括弧内の数字は満年齢）
1856	10. 大坂に生まれる（幼名・松之助） 11. 父・泰兵衛が亡くなる
1857	
1858	

- (46) 作成にあたっては、「回顧録」、「母のおもかけ」、これまで引用した資料、文献のほかに、『官報』、『属竜居頼三』国立公文書館所蔵『枢密院文書・枢密院判任官以下転免履歴書・明治』（枢 00190100）、「内閣属竜居頼三外一名御用有之大本営所在地へ出張被命ノ件」国立公文書館所蔵『任免裁可書・明治二十八年・任免卷三十五・判任官以下』（任 B00087100）、「非職内閣属竜居頼三新聞社ノ業務ニ従事願ノ件」国立公文書館所蔵『公文雑纂・明治二十九年・第一卷・宮内省・内閣一』（纂 00364100）、「勲六等龍居頼三農商務大臣秘書官被任ノ件」国立公文書館所蔵『任免裁可書・明治三十一年・任免卷二』（任 B00165100）、「非職農商務大臣秘書官竜居頼三東京日日新聞社ノ業務ニ従事スルノ件」国立公文書館所蔵『公文雑纂・明治三十一年・第二十二卷・司法省三』（纂 00457100）、『南満洲鉄道株式会社十年史』南満洲鉄道株式会社（1919）、南満洲鉄道株式会社庶務部調査課編『南満洲鉄道株式会社第二次十年史』南満洲鉄道株式会社（1928）、猪野三郎編『大衆人事録 第3編』帝国秘密探偵社・帝国人事通信社（1930）を使用した。

1859	
1860	
1861	
1862	
1863	4.香川塾に入る (6)
1864	
1865	
1866	
1867	1 (頃).高木屋で奉公する (10) 夏.大病を患う (10-11)
1868	1 (頃).回復する 高木屋と絶縁し、中井家に援助を求めるも断られる 4.母と河内編の行商を始める
1869	1 (頃).島田屋で奉公する (12)
1870	2.半元服を許される (13) (翌年、元服の格に進む)
1871	春.造幣局の久世治作から金銀分析の方法を学ぶ (14)
1872	夏.名替の格に進み、名を松之助から頼三に改める (15)
1873	秋.上京する (16-17)
1874	夏.愛子と出会う (17) 12.島田組が破産し、残務処理にあたる (18)
1875	春.愛子と再会する
1876	8.愛子と結婚し、母とともに上京する (19)
1877	春 (頃).島田組時代の知り合いであった山縣昇の広運舎を手伝う (20) 夏.島田組の同僚だった平井雄介の誘いで和久井組に入り、静岡行きを決める 夏.後藤象二郎から高島炭鉱を手伝うよう依頼されるが断る
1878	4.長女・小浜が誕生する (21)
1879	夏.和久井組から永島店に移籍し、静岡店で勤務する (22)
1880	
1881	2.次女・栗子が誕生する (24) 春.永島店本店で勤務するために上京する 暮.永島店を退社する (25)
1882	築地でカナダ・メソジスト教会の人びとと交流する 12.大森鐘一の斡旋により、参事院書記生 (内局勤務) となる (26)

1883	8.旧知の伊東巳代治参事院議官補の仕事を手伝うようになる
1884	1.長男・松之助が誕生する (27) 3.太政官五等属兼制度取調局御用掛 7.太政官四等属 冬.義父・奥田恒七が亡くなる (28)
1885	2.特派全権大使書記官として天津談判に随行し、伊藤博文に認められる 12.内閣属 (29)
1886	2.臨時官制審査委員附 5.判任官三等
1887	1.次男・豊が誕生する (30)
1888	6.枢密院属 (判任官三等) (31)
1889	3.伊藤枢密院議長の出張に随行 (32) 10.三男・喜久三が誕生する
1890	5.判任官二等 (33)
1891	5.大津事件のため、伊東内閣書記官長の出張に随行 (34)
1892	4.三女・寿恵子が誕生する (35) 8.内閣属
1893	
1894	9.日清戦争のため広島へ出張 (37)
1895	1.講和条約締結のため伊東にしたがって広島に行き、その後下関へ赴く (38) 2.四男・昌吉が誕生する 母らが上京し同居を始める
1896	10.日報社 (東京日日新聞) に入社する (理事) (39)
1897	
1898	1.農商務大臣秘書官 (高等官三等) (41) 4.非職 5.日報社に復帰する
1899	
1900	3.パリ万国博覧会に参加するために、欧米外遊に出発する (43)
1901	
1902	9.五男・五郎が誕生する (45)
1903	
1904	12.日報社を退社する (48)

1905	春・山本達雄元日銀総裁の斡旋で、信濃銀行東京支店支配人となる
1906	11. 桂太郎元首相や伊東巳代治の斡旋で、南満洲鉄道株式会社に入社する（秘書役長）（50）
1907	5. 後藤新平満鉄総裁の渡清に随行する
1908	
1909	10. 伊藤博文朝鮮統監の渡清に随行し、暗殺現場に遭遇する（52）
1910	
1911	
1912	7. 桂太郎元首相の欧米視察に随行する（55）
1913	5. 愛子の継母・登免子が亡くなる（56） 9. 母・永が亡くなる
1914	8. 東洋協会理事（57）
1915	2. 南満洲鉄道株式会社東京支社主事（58）
1916	12. 南満洲製糖株式会社取締役（60）
1917	2. 南満洲鉄道株式会社理事 夏・吉長鉄道借款改定契約調印のために北京に出張する 秋・「回顧録」の執筆を開始する
1918	6. 帝国鉄道協会理事（61）
1919	
1920	
1921	2. 南満洲鉄道株式会社理事を退任する（64） 秋・「回顧録」が完成する（64-65） 12. 服部時計店監査役（65）
1922	
1923	松之助に家督を譲り隠居する（66-67）
1924	
1925	
1926	
1927	
1928	
1929	
1930	

1931	
1932	
1933	
1934	
1935	2. 愛子が亡くなる (78) 10. 亡くなる